
社長補佐物語（仮）

erow

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

社長補佐物語（仮）

【Nコード】

N8225T

【作者名】

erow

【あらすじ】

2110年、過去の戦争により国家は疲弊し、大企業に依存しきるようになった時代。

その大企業の中で最も活発な分野が、軍需産業。数ある軍事企業の内、その中でも抜きん出ている数社。その内の一社の美人社長。の補佐の活躍と、大切な日常を描く。

企業戦士（前書き）

この作品はオリジナルですが、アニメやゲームの設定を参考にして世界観を構築しています。

よってある程度似通っている部分はあると思いますが、何卒ご容赦を。

舞台は2110年の地球、今から百年ほどあの時代となってます。その間に色々ありますが、それについてはまた時系列や兵器紹介で出します。

企業戦士

真つ暗な地表に、小さく存在する光を眼下に捉え、一機の兵器がすさまじい速度で降下、否、落下していく。パラシュートがあるとわかっていても冷や汗が止まらない落下速度。視界に表示される高度の数字を睨み、地表から三百メートルまで落下した時点でパラシュートを開く。

急な減速による衝撃が全身に伝わる。

地表に到達する数秒間、航空機から飛び降りる前に受けた、この作戦の説明を思い出す。

b r i e f i n g

『はじめまして。私は本作戦のブリーフィングを説明させてもらうAI、名はエクスカリバーと申します』

合成された中性的な音声が狭い機体の中に響く。男か女か、どちらかはわからん。性別なんてものはAIには unnecessary 概念なんだろう。できれば人間の女性。さらに望むなら美女のほうがよりヤル気が出るが、社長は不要な物は一切切り捨てるタイプだ。望むべくもない。

集中して、AIの話を聞いていく。

『教科書どおりに事を進めるならば戦車とASのセットで行動するのが常識ですが、今回の作戦は社長直々のご命令により、あなた一人で遂行することが望まれております。そのため、支援の類は一切

存在しません。あらかじめご了承ください。では、この作戦についての説明を開始させていただきます』

眼前のモニターに、複数の映像が表示される。施設や物資、人員の数、セキュリティの配置などなど。結構な量の情報が表示されるが、要は必要最低限の事さえ覚えればいいわけだ。細かいことは頭から抜けていても問題ない。死なずに殺せば、それで終了。シミュレーターとほとんど同じ。違うのは、コインを入れてもコンテンツニューができないということだ。

『本作戦の概要は既にご存知でしょうか』

「パラシュートでの降下後、敵対企業の施設に強襲をかけ、そのまま制圧」

『非常によろしいです。では、その詳細についてお話しします。まず、施設の付近に降下、その後塀を突破して内部に侵入。

巡回が10人と、警備の兵士が30人、フォレスト製ASも三機

アーマードスーツ

確認されていますので、その点についてはご注意ください。なお、これらの数字は施設規模から推測した最低限の人数となりますので、実際はさらに多いと考えてください。

制圧の方法についてですが、特に指定はありません。全てあなたにお任せします。内部の人間の配置については、モニターをご覧ください』

「制限時間と増援の心配は」

『制限時間は設けておりませんが、アーマードスーツの活動限界、五時間以内に回収地点まで移動していただくために、三時間までとさせていただきます。増援は、他の施設との作戦同時進行なのでイレギュラーが存在しない限りありません。弾薬の追加はありませんので、出来る限り節約してください。もうすぐ降下ポイントに到達するので、用意してください』

彼は黙ってアーマードスーツの充電ケーブルを取り外し、内部電源^リに切り替えて、ハッチに向かう。

『減圧開始』

空気が抜けていき、モニターに表示される気圧の値が一気に下がりはじめ、外と同じ気圧で値が固定される。パラシュート降下は投身自殺をしているような感覚がして嫌いなんだが、仕事だから仕方が無い。

『減圧完了。ハッチ開きます』

ハッチが開き、吸い込まれるような黒い空がモニター越しに視界に入る。自然と、つばを飲み込む。まるで大きな怪物が口を開いて俺を飲み込もうとするように見えて、仕方がない。

暗所恐怖症、とまではいえないが、暗いところはもうも苦手だ。子供じゃないんだから、いい加減に克服できてもいいんだが。

『御武運を』

数歩前に出て、ハッチの限界ギリギリのところに立つ。はるか下に見える灯りを見つめて、それに向かって飛び降りる。一瞬だけ空中に飛び上がった後、重力に引かれて急加速し始める。

相変わらず、高いところから落下するこの感覚には慣れない。恐怖で思わず泣きたくなるが、我慢。

.....

地表が近くなったので、パラシュートを切り離し、スラスターを吹かしてさらに減速。機体の関節にあまり負荷を与えないように、出来る限りソフトに着地する。すぐにリーダーを確認し、周囲に敵が居ないことを確認。それから現在地をGPSで確認。目標との方向と距離を再確認する。

『無事に着地できたようですね。では、そこから北へ移動してください。3km行けば目標施設があります』

「了解。作戦開始。ローラーロック解除」

スラスターを吹かし、足の裏につけられた球体のローラーも回転。自動車と言うギアチェンジ無しに、五秒ほどで一気に100km/hまで加速する。

今乗っているのは、会社から社員に貸し出される商品の一つ、X-S-03アーマードスーツ。ポリス社を象徴する兵器であり、同時に現在の戦争の主力。歩兵の機動力、防御力、火力の大幅な向上が目的で開発されたものであり、外装はもはや人の形をした装甲車と言う他ない。

見るからに分厚い装甲。生身の人間が使うのは不可能な、通常ならば車両に載せたり地面に固定して使用するような兵器を軽々と運用し、装甲車並みの防御力、それ以上の悪路走破能力を持ち、人間と同じだけの旋回能力を持つ。

戦車やヘリ、航空機や艦船が戦争の主役とするなら、歩兵は脇役。その中でもこの兵器は名脇役というべき活躍をする。もともと戦車の入れない場所や航空機での援助が期待できない場所での戦闘を想定して作られたもので、比べること自体間違いではある。

ちなみにそれを少し自分用に調整したものを使用していて、現在搭載している火器は回転銃身機銃、40mm擲弾発射機、30mm単発砲、20mm機関砲の四つと、EMPグレネード三発、ブレード一本。戦車やらヘリやらが出てきたらしっぽを巻いて退散する以外にないが、AS相手ならなんとかなる。

それと、今回は奇襲ということので使い捨ての小型ECM装置を使っている。使い捨てなので、小型且つ高性能を実現している。

商品の説明をしている内に、妨害もトラップもなく、ほんの数分足らずで施設の外周に到着。監視カメラと、のんびり談笑している巡回の兵士三人を視界に納め、対人、対装甲装備のロックを解除。武器は右腕部対人火器を選択し、視界に現れた計算された弾道と歩兵を重ね、通信をオンにする。

「こちらアルファ1、^{エンゲージ}交戦開始」
『了解、交戦を許可』

交戦を報告。正式に許可を得たところで、見回りの油断しきった歩兵達を一瞬でひき肉に変える。同時に警報が鳴り響き、施設の中から増援がゾロゾロと出てくるが、それもグレネード弾でまとめて吹き飛ばす。

壁の向こう側に大きな熱源反応が二つあったので、右肩に載せた20mm機関砲で壁ごと蜂の巣にする。

大穴の開いた壁から、施設内部に侵入。あまりに脆弱な警備に辟易しつつ、想定外の侵入者の姿を見て驚き、装備の差に絶望している兵士をひき肉に変える単純な作業に戻る。

通路の曲がり角から出てきた最後のASには、EMPグレネードを投げて動作を鈍らせ、スラスタを全開にして突進。壁にめり込

ませて行動不能にしたところを、30mm砲のゼロ距離発射で胴体を完全破壊。中の人間はおそらくグチャグチャになっているに違いない。

一方、同時刻。

「やはり、手塩にかけて育てただてただけある。素晴らしいな。あいつは」

モニターを眺めつつ、コーヒーを手に取る。展開こそまるで少し出来のいいB級映画のようだが、実際に命を奪い合っているという臨場感。刺激は筆舌に尽くしがたい。

『社長』

急に画面が切り替わり、モニターに受付嬢の顔がアップで写る。楽しみを邪魔されたのは気に食わないが、直接私に連絡が来るということはそれなり以上に重要な事柄なのだろう。

「緊急の要件か」

『はい。フォレスト社の社長が参られました。現在は特別応接室に待たせています』

フォレスト社……今複数の部隊に襲撃させている施設はフォレスト社の重要施設。こうならないよう、他社製のASを使わせていたはずだが、予想よりも早く露呈したようだ。さすがに、今まで散々裏で手痛い妨害をしてきただけあって、頭は回るか。

「……よろしい、今からそちらに向かう。少し待て」

画面の電源を落とし、椅子から立ち上がって部屋の外へ。彼が帰ってきたら、何か臨時のボーナスでもやらないと社員に示しがつかないと思いつつ、敵対企業の社長の待つ応接間へと向かう。あまり会いたくない相手ではあるが、それでも会わなければならないのが社会の都合だ。労働力の大半が機械に置き換えられた世界とはいえ、古今東西それは変わらない。

IDカードを使って護身用の拳銃をケースから取り出し、壁がガラス張りのエレベーターに乗り込む。ほんの数秒で十階以上の階を、不快感もなく昇降する。子供の頃はこのエレベーターから眺める風景に興奮していたものだが、社長の椅子に着いてからはなんとも感じなくなってしまった。

エレベーターを降りると、警備の兵士二人が最新式の銃を肩から提げて直立不動で待機していた。最新式ということだけはわかるが、銃の名前は知らん。一月前に出した商品でも、私自身が触れることはないのだから、知っていても知らなくても問題ないだろう。

「社長、フォレスト社、アーサー社長がお待ちです」

「所持品のチェックはしてあるか？」

「はい。護身用として拳銃を所持していましたが、既に接收してあります」

「ご苦勞。では引き続き警備を頼む」

「「はっ！」」

応接室のドアを開き、中に入るとフォレスト社の社長からの非常に敵意のこもった視線で迎えられた。敵意を向けられる理由は十分にあるが、気分が悪い。

「アーサー社長。モニター越しではなく、こうしてお会いするのは何時以来だろうか」

「さあな。私は忙しくてそんなことは覚えていない」

「まあ、どうでもいいことだな。それで、今日はどんな用事だ？」

知っているが、あえてとぼけた事を言う。私にとって、会社にとってこいつは商売敵でしかない。先の企業間戦争でも対立し、この会社も少くない被害を負った。それでも終わってからは一時的に、表面では和解した。しかしそれ以降が問題だ。産業スパイ程度ならばまだ許容できる。しかし、施設を爆破したり社員を拉致監禁したり。あまりに嫌がらせが過ぎたため、彼女の堪忍袋の緒が切れた。今日の敵対施設の制圧は、その報復が目的。

「ふざけるなよ小娘。今起きているわが社の施設への攻撃！ あれは貴様の私兵ではないのか！！」

「小娘と呼んでくれるとはありがたい。それはそうと、さすがに狸。察しがいいな。その通り。全て私の指示だ」

「今すぐやめさせろ！」

「断る。戦争が終わってからの破壊工作、社員の拘束、その他諸々の三十数件の妨害工作の数々。いい加減に私も我慢の限界だ」

淡々と事実を告げる。表情にこそ出さないが、今すぐにでもスーツの中に隠してある護身用拳銃に手を伸ばし、狸を撃ち殺して皮を剥いでやりたいとすら思っている。だが、私は狸を殺したことがない。殺したとして、皮を剥げるかどうか。

「異論はあるか？ あるなら聞こう」

「くっ………忌々しい魔女め」

魔女か。久々にそう呼ばれた気がする。血も涙もない、残酷な魔

女。人が苦しむのを見て楽しむのが好きな魔女か。私への世間の認識はそうなのだろう。人を殺す武器を作って、売っている会社の社長だ。それも仕方ない。

「わかったならさっさと帰れ。そして早急に資産を持てるだけ持っ
てどこへなり逃げるといい。貴様の会社が乗っ取られる前にな」

あえてこの場で殺さないのは、私なりの慈悲であり、嫌がらせだ。
こいつには、生きて己の会社を買収されるのを見て、ヨーロッパ圏
内の営業権をこのポリス社が独占するのを屈辱の中で見上げてもら
う。

「…覚えている。必ず、いつか必ず貴様を殺してやる」

「殺し屋も私は狙えんさ。諦めろ、狸爺。じゃあな、私も忙しいん
だ」

もう奴には興味も用もない。あとは野垂れ死にしようが屈辱の中
で生きようが関係ない。私は私の会社が大樹に育つのを眺めるだけ
だ。

社長と社畜（前書き）

主人公の立ち位置は社長補佐。

給料はいいけど社長の命令には逆らえない、うれしいけど辛い微妙な立ち位置。

社長と社畜

机と椅子と、パソコンしかない非常に広い、しかしシンプルすぎて寂しい部屋で、美女と男が会話をしている。会話の内容は恋仲の男女のそれではないものの、間違っても一般人のするような会話ではないことだけは確かだろう。

「他の部隊はA S 3機の小隊で一つの施設の攻略がやっと。しかも被害もそれなりに出ているというのに。お前は一人でA S が三機存在する敵施設を制圧。しかも被弾はわずか、か。期待以上だ」

社長直々にお褒めの言葉をいただく。やはり美人にほめられるのは悪い気がしない。それどころか、より一層職務に励もうという気持ちになる。今思えば上司は美人で、給料はいいし、仕事もなかなか楽だ。こんなにいい職場はなかなか無いと思う。

稀に嫌なこともあるが。

「今回も運が良かっただけです」

「謙遜するな。運がいいだけであそこまでの働きができるはずがないだろう。腕が良くなければ、施設の制圧などできんよ」

兵器の性能と脅威を誰よりも理解している人間である彼女の言葉は、確かな重みを持っている。だが、俺はそう思わない。くどいようだが、運が良かっただけ。地雷などのトラップも無かったし、戦車も戦闘ヘリも、イレギュラーも居なかったから無事に制圧できた。

「恐縮です。しかし、私がしたことは他人にも可能です」

最低でも、ツーマンセルで行けばあの程度は制圧可能だろうと思

う。ある程度腕に自信があるが、その戦力がどの程度かは弁えているのでうっかりで死ぬことはないだろうと思う。

「お前と同じだけの働きができるそう人間なんて居ないさ。居たとしても、そんなに多くない」

「そうでしょうか」

「そうだよ。で、そんなお前に臨時ボーナスのようなものをやろうと思う」

ボーナスか。なかなか太っ腹な上司だ、跪いて足を舐めてあげてもいいくらい尊敬する。

だが、ボーナスよりももっと重要なことがある。

「ボーナス以前に、先月の給料をまだ頂いていないのですが」

そう、実は先月の10日に振り込まれているはずの給料が、全く振り込まれていない。ガリガリと減っていくばかりで、増えることがない。弾薬費、修理費、輸送機の燃料、そしてもう一つ会社とは何も関係がない要因が。もう桁がパツと見て数えられるほどになっている。かなり切り詰めた生活を送らなければ、生きて行くのにも一苦労するほどだ。

「ここ最近ずっと働き詰めだろう。しばらく休暇を取って旅行にでも行くといい。なんなら私が連れて行ってやろう」

「口座にも財布にもお金が全くないのですが。給料を貰えないと明日の食事すらままならないほどなのですが」

確かに旅行は魅力的な提案だが、それよりも給料の方が数段重要度が高い。生死にかかっているのだから、当然の話だ。

「遠慮するな」

「聞けよおい。労働法違反で訴えるぞ」

「そうだな、日本にでも行くか。キリザワとも少し話があるしな。私が話をしている間は観光でも楽しむといい」

やれやれ、いつものパターンか。こうして違う話題にすり替えて、給料のことを有耶無耶にされて、すぐには払ってもらえないパターンだ。やってられないが、この会社を辞めても他に行くところもない。ささやかな嫌がらせをして、一度引くとしよう。

「無視すんな行き遅れ。30日前で処女」

魔女と呼ばれる彼女の唯一のコンプレックス。その性格故に、嫁の貰い手以前に、ロストヴァージンすらまだ。俺がこの会社との契約を結んでから十年近く経つが、当時の二人の年齢は12と19。今の年齢はというと、22歳と、25歳と48ヶ月プラスα。つまり、そういうことだ。

「黙れ。絞め殺すぞ」

戦場ですらなかなか味わえない、脊髄を引っこ抜かれて代わりに水柱を背骨に突っ込まれたような感覚。濃密な殺意。

しかし、何度もこんな殺意を浴びていれば慣れるという物。こちらも負けじと睨みつけて、給料をせがむ。

「給料払え。スト起こすぞ」

「黙れ社畜」

「それが社長補佐に対して言う事か」

「社員は階級関係なく全員社畜だ。黙って働け」

「そう言うなら給料払え。それと弾代は会社で負担しろ」

「うちの会社は色々と苦しいんだ。社長補佐ならその程度知ってるだろう」

「社員を養うのが会社の義務だろう。社長なら義務を果たせ」

「それは経営部に任せてある。決して給料をお前の分だけ払わせていないなんて事はないぞ」

「どうでもいいから三か月分の給料、90万ユーロをさっさと払え。会社のためにどれだけ働いてると思ってる」

「食事は私が作るからいいだろう。少しくらい我慢しろ」

「食事は確かに重要だがな、給料はもう一ヶ月以上待ってるんだぞ。いい加減に払ってくれないと家族を養えん」

「そのときは私の家に来ればいい。歓迎するぞ、盛大にな」

「誰がレイプされるとわかっててそんなところに行くか。俺の守備範囲は二十代前半までだ」

「決めた、給料はもう払わない。家族もろとも餓死しろ」

「おい、ふざけんな」

こうして、会話は加速度的に過熱し、しばらく意味の無さそうで実は外部に知られたら非常にマズイ会話が暴言雑語混じりにしばらくの間繰り広げられる。しかしお互い人間であることは確かなので、時間がたてばいい加減に疲れも溜まり、その会話も次第に収束する。

「……………もうやめるぞ。これ以上はあまりに不毛だ」

「そうだな……………とりあえずは今月分の給料だけでいい。それだけもらえれば、どんな命令でも余程のことがない限りは従おう……………」

今思い返せば、あまりに不毛過ぎる。不毛すぎて疲れるだけだ。

社長と社畜（後書き）

ギリザワというのは、2110年時点における大軍事企業の一社のことです

設定（前書き）

用語の解説、兵器の解説、世界観の基となる時代の移り変わりを公開します。混乱すると思うので。

11／5 年代表削除

設定

企業

一般に軍事企業のことを指す。その中でも、下記七社が世界中のシェアを占める。

フォレスト社 (EU)

ポリス社 (EU)

ボルシェヴィキ社
ロシア

フォーマルハウト社 (OPEC)

アンブレラ社 (USA)

霧沢重工業 (日本)

大華社 (中国) 読みはターファン

フォレスト社はポリス社により破産寸前に追い込まれたので、実質六社。

主人公 クロード

所属勢力、ポリス社

本物語の主人公。五歳のときに父親が失踪。母子家庭で、妹と母親を養っている。十歳という低年齢で企業に雇われ、訓練を受けて使い捨ての駒として使われていたが、生き残り続けて早十年。いつの間にか前社長補佐が殉職したため、新しい社長補佐として活動する。それに平行して父親探しも実行する。

その過程で能力を認められ、企業でもそれなりの位置に就くことになった。

社長と個人契約を結び、直属の駒として活動する。

行動の優先順位は、契約、金、企業への奉仕。

特技は語学の習熟。ビジネス会話までできるのは、ヨーロッパ各国の言葉と日本語。ロシア語はあまり上手でないが、話せるには話せる。

性能表

射撃総合 A

格闘射撃 B

近距離射撃 A

中距離射撃 B

狙撃 S

白兵戦 B

敏捷 A

反応速度 A

武器 C

筋力 B

技術 C

その他

戦闘続行（ダメージ許容量） B

精神力（拷問などに対する耐性） A

知力 C

語学 A

経営学 D

カリスマ C

魅力 B

搭乗機体、XS-03カスタム

地雷を踏んだときのため、足回りの装甲を厚くしている。結果、下半身が重くなるため安定した射撃ができるようになった。その代わり、最高速度が少し落ちる。通常機120km/h、カスタム80km/h

ヘンリエッタ

所属勢力 無所属（一般人）

主人公の妹。まだ学生だが、大人顔負けの語学の知識を持つ。

成績優秀でスポーツ万能、それと結構美人なので、学校一の優等生兼人気者。

自分は運動でも勉強でも、兄より優れていると思っているが、実はその真逆であることを知らない。

クロードが仕事で何をしているかは知らない。

特技は速読。普通に読んだら丸一日はかかる本を一時間で読む。

性能表

射撃総合 E

格闘射撃 E

近距離射撃 D

中距離射撃 E

狙撃 E

白兵戦 C

敏捷 B

反応速度 B

武器 D

筋力 D
技術 C
その他

戦闘続行 E

精神力 D

知力 B

語学 B

経営学 C

カリスマ C

魅力 B

アリス

所属勢力・無所属（一般人）

20歳

主人公クロードの恋人。極普通の、どこにでもいる一般人の女性。そこそこの美人だが、あくまでそこそこ。社長ほどではないが、スタイルも結構いい。地元で人気の喫茶店でウェイトレスとして働いている。店は別に特殊な階層の人が来るわけではなく、一般人しか来ない。

エレナ・ポリス

所属勢力・ポリス社

ポリス社の社長であり、主人公の直接の雇用主。あだ名は魔女。30間近で独身。

冷徹な性格で、敵対する者は誰であれ遠慮なく叩き潰す。しかし社員には寛容。

通称、行き遅れ。ケチ。

あらゆる言葉をマスターし、喋れない言葉はほぼないと言われる。

射撃総合 D

格闘射撃 D

近距離射撃 D

中距離射撃 D

狙撃 E

白兵戦 C

敏捷 C

反応速度 B

武器 C

筋力 C

技術 D

その他

戦闘続行 E

知力 A

語学 S

経営学 S

カリスマ A

統率力 A

魅力 A

霧沢敬之
所属勢力・霧沢重工業株式会社

霧沢重工業株式会社の代表取締役社長。エレナ・ポリスとはそれなりに仲が良く、酒を飲み交わす仲。

性格は非常に温厚だが、かなりの変わり者でもある。簡潔に言うに変人。しかし会社の重役たちも負けず劣らず変人ぞろいなので、それをまとも上げる手腕はかなりのもの。

中国、ロシアの企業とは市場を巡っての小競り合いが絶えないため、それが頭痛の種であり、頭痛薬が手放せない。

社長であると同時に、凄腕のAS操縦者でもある。

特技、ASの操縦。

性能表

射撃総合 B

格闘射撃 B

近距離射撃 A

中距離射撃 A

狙撃 D

白兵戦総合 B

敏捷 B

反応速度 A

武器 B

筋力 B

技術 A

その他

知力 A

語学 S

経営学 S

統率力 A

カリスマ B

魅力 D

アンジェリカ・トルスターヤ

所属勢力・ヴォルシェヴィキ社

年齢は二十代前半で社長という異例の地位だが、その経営能力は非常に優れていて、ほとんど一人で会社をまとめ上げている。

徹底した実利主義で、会社の利益になる者は様々な手を使い勧誘。

逆に、利益にならないものは容赦なく追放する。

父から会社を譲り受け、社長に就任してすぐ大規模な粛清を行ったので、多方面から命を狙われている。ある程度の戦闘はこなせるが、基本的に補佐任せ。

射撃総合 C

格闘射撃 C

近距離射撃 B

中距離射撃 C

狙撃 D

白兵戦総合 B

敏捷 B

反応速度 B

武器 B
筋力 C
技術 B

その他

知力 A
語学 B
経営学 S
統率力 A
カリスマ S
魅力 A

ポリス社

世界中を広く手にかける複数の軍事企業が融合して出来た一つの大会社。傘下に多数の銃器、兵器メーカーを雇っており、一つの戦力としてカウントされる。
主な仕事は、

質量兵器の開発。

実地テスト。

兵器の売買。

航空兵器の開発。

兵士の貸し出しの4つ。社員は五万人ほど。

経営方針は、各分野の責任者と補佐、人事部長、社長の計十人が集まり、予算配分、役員追放、など会議を行う。

なお、ポリスというのは英語での「警察」ではなく、ギリシア語での「都市」を意味し、多数の企業がその都市の中に納まっているという会社のあり方を示す。

生物兵器、化学兵器、光学兵器、電磁兵器、物理兵器。それぞれの分野での開発力に非常に長けているが、どうしても財力に乏しく実用化には至らない。

なので、一番コストの低い質量兵器の開発を専門にしている。

霧沢重工業株式会社

日本の企業を代表する、正真正銘一流の大会社。

軍事企業だということは公表されているが、その上で日本国内で就職したい会社No. 1に選ばれている。

子会社にゲーム会社があり、実際のASのシミュレーターをゲーム用に改造。それが大ヒットして、世界中に売っているため、かなりの黒字を得ている。

ポリス社から兵器の理論を買取り、開発、実用化し、兵器に転用する。

主な仕事

エネルギー兵器と電磁兵器の開発

軍用艦船の開発

航空兵器の開発

兵器の貸し出し（日本軍へ）

子会社の仕事

ゲームの開発

ヴォルシェヴィキ社

ロシアを代表する企業。元々は天下りの温床だったが、社長による大粛清で今は清廉潔白な会社になっている。多くの中小企業を傘下に加え、積極的に意見の取り入れを行っている。

AS搭載兵器の開発

射撃管制装置の開発

ロケット・ミサイル兵器の開発

人工衛星の開発・打ち上げ

マストライバーでの物資打ち上げ

アンブレラ社

南北アメリカを代表する企業。天下りの温床だったり、脱税したりもするが、邪魔は力づくで排除するというパワフルな経営方法をとっているためあまり文句を言われることがない。

傘は核の傘であり武力の傘でもある。決して某生物災害のウィルスを作ったあの会社ではない。

軍用車両の開発

ロケット・ミサイル兵器の開発

人工衛星の開発・打ち上げ

兵器全般の生産

アーマードスーツ（AS）

本編中で語ったとおり、外観は人の形を模した戦車である。一般にASというとXS-03型の事を指す。

開発コンセプトは、歩兵の強化

重量は、武器を搭載せず、着用者無しの状態でおよそ800kg。

搭載火器は光学兵器、エネルギー兵器など多岐に渡るが、主人公は実弾兵器を好む。安上がりで済むのがいいらしい。

移動方法は三パターンあり、通常の足を使った歩行。二つ目は足の裏のタイヤを回転させて進む。三つ目は、スラスターを使用した高速機動。

一つ目は悪路でも走破可能な利点があり、二つ目は静粛性に長けている。三つ目は長距離を一気に移動できるという、それぞれの利点がある。

基本的に、どの会社が作ったもので性能が変わってくる。

ちなみにポリス社は高火力高機動を実現する反面、防御を犠牲にしている。

開発兵器

パワードスーツ試作機

XS-00

筋力強化による資材運搬能力の強化が表向きの目的。実際は兵器化するためのデータを取るためだった。

最大積載量 90kg

パワードスーツ(Poword Suit)

AS-01

疲弊時の筋力補助、車両などの兵器に頼らない機動力確保を目的として開発された。しかし、機動力が上がるだけでは逆に現場が混乱

し、実地試験の段階では被害が低下しなかったため不評だった。充電式のバッテリーで動くため、かなり安価。

最大積載量150 kg

AS-02

アーマードスーツ (Armored Suit II AS)

身長2.8 m

パワードスーツの欠点である防御面の脆弱性を補い、「機動力を多少捨てても生存率を確保したい」という現場の声から生まれた。外見は、等身大よりも少し大きいロボット。レーダーとモニター内臓。人間がこれを着込み、内部のセンサーが動きをトレース。背中に武器を背負って行動する。パワードスーツに装甲を装備し、出力を強化し、高火力の武器を背中に搭載する。回転、機動性能の低さから背中から撃たれる、関節部分を狙われる、対戦車ミサイルで撃たれるなどの事件が続発し、これまた不評。

これもバッテリー。

最大積載量 400 kg

しかし、下半身を戦車のように無限軌道に換装するという画期的な現地のアイディアにより、移動砲台として用途が復活した。ある程度の被弾には耐えられるのに加え、専用の盾も開発されたことで、装甲車よりは役に立つという評価になった。また、脚部の変更ににより積載量も大幅に上昇。

最大積載量、800 kg

装甲車よりは安上がり

AS-03

アーマードスーツ改 (Armored Suit 2nd)

身長2.5m

前世代の物に修正を加え、複数のスラスターと、足の裏に球体のローラーを付けて旋回性能、機動性能を十分に確保。足場が悪いところでは通常の歩行で移動できる。人間で行える動きはほぼ全て行え、旋回行動もほぼ隙がなく行える。スラスターを横軸方向に向けて起動すれば回避運動も取れるし、地面に向けて起動して跳躍すればある程度の障害物は飛び越えられる。また、機動力を活かしての接近戦もそれなりに強力。

欠点としては、装甲が脆弱。成形炸薬の直撃にすら耐えられない。電磁装甲を使えば弾けるが、バッテリーの消耗が激しいので乱用は禁物。重機関銃の集中砲火を浴びたらアウト。なので、狙いをつけられないよう常に動き回らなければならない。

またまたバッテリーである。

最大積載量 320kg

冷却装置も完備で、中は快適。

バッテリー駆動なので被弾して爆発することはない。

一応全地形対応だが、真価を発揮するのは屋内、山林、市街地などの限定空間。開けた場所は戦車やヘリにお任せ。

軽く中装甲目標の排除が主な仕事。

戦車や航空兵器の排除は、レールガンかミサイルが欠かせない。

戦闘ヘリよりは安上がり

ASシリーズ(02以降) 搭載武器。

対人装備

ミニガン 15kg

40mm x 53 擲弾発射機 40kg

対装甲兵器装備

30mm 単発砲 40kg

20mm x 138 チェーリング 100kg (弾薬)

50mm レールガン 140kg (弾薬あり)

対地対空ミサイル 一発60kg

デフォルト装備

ブレード

EMP グレネード

XS-03には対人装備、対装甲兵器装備はそれぞれ二つずつしか装備できない。

XS-02改なら全て搭載可能。ただし遅いので鋼鉄の棺桶になることまちがいなし。

社長と補佐の来日

ここは日本のとある会社の会議室。そこで白熱した議論が交わされていった。

議題は、ポリス社の社長と社長補佐の二名の関係について。

ある人は「愛人だろう」と主張し、またある人は「奴隷と女王様」と主張する。そして別の人間はその逆、ご主人様と雌奴隷との主張する。さまざまな事実無根の妄想が飛び交うかなり異様な会議と化しているが、三十分ほど前の議題は、ポリス社の社長と社長補佐が来日、対応をどうするか。という話だった。

なぜこのような議論が交わされるようになったかと言うと、話し合いの結果二人の歓迎が決定し、重役達が席を立ち、そのまま解散しようとしたときだった。

あの二人、いつも一緒に居るがどんな関係なんだろうな。

と、社長が呟いた。その一秒後には立体ディスプレイに、「ポリス社の社長と社長補佐の関係について」という文字が表示され、立っていた重役達が皆同時に席に着いた。そこから、今の状況になったのだ。

言っておくが、この会社はポリス社同様に世界でも有数の軍事企業である。中露という二つの大国に対し、一步も引かずに対等に交渉する日本の軍勢力、そのほぼ全てを生産、運用するのがこの霧沢重工業株式会社。

だというのに、その重役はこんな変人ばかりである。

「結局のところ、どうなのかは本人に聞くのが一番良いだろう。フ

オレスト社を潰した事についての追及の後に聞いておこう」

「頼みますよ社長。我々の萌えはあなたにかかっています」

「任せておけ」

現代においては、日本人イコール変態という方程式が国際的に成り立ってしまったているのは、この会社のせいなのかもしれない。

同時刻。空港にて。

「ここが日本………湿度も気温も高くて気持ち悪いな」

ジメジメした湿気と熱気のせいで、不快指数が非常に高い。湿度の低い地方に住んでいたわけではないが、この極端に高い湿度には慣れていなければ辛い。そして俺は慣れていないので辛い。

「梅雨だからな。仕方ない」

一方社長はというと、今迄に仕事で日本に来たことが何度もあるので、日本の気候には理解がある。仕方ないの一言で割り切ることができるらしい。蒸し暑いと感じているのは、全く同じのようだが、気の持ちようで感じ方の度合いは全く違う。確か、心頭滅却すれば火もまた涼しかったか。

「行くぞ。車は借りてある」

社長の斜め後ろを歩き、警戒しながら駐車場へと進む。結構な数の人間がいるので、怪しい者は居ないかを確認しながら進まない、銃を持った不審者が飛び出してきたりした場合に迅速な対応ができないからだ。

そんな所で、駐車場前に一人、白髪の老人がこちらを向いて立っているのを見た。前後左右の確認を一度して、不審な人物が居ないかを確認してから社長の前に出る。

「失礼、ポリス社社長と社長補佐のお二人でいらっしゃいますか？」

老人が口を開く。その表情や雰囲気には、敵意の欠片も見当たらない。しかし警戒しておくに越したことはない。どれだけ警戒していても、殺られる時には殺られる。

「社長、迎えは頼んでいましたか」

「いや、頼んでいないはずだが」

「……動かないでください」

拳銃を抜き、安全装置を外して銃口を老人に向ける。もしも相手がヒットマンならば、即座に脳天をぶち抜けるように準備して。

だというのに、老人は驚くことも怯えることもせず、笑顔でゆっくりと手を上げた。

「そう警戒なさらずに。私は霧沢重工業株式会社から派遣された、ただの運転手です。ただの運転手に、そんなお二人をどうこうできるはずありませんよ。それに、暗殺するならこうも堂々と姿を表したりしません」

老人はやはり冷静に言葉を返す。普通なら銃を向けられれば焦るだろうが、こういった事態には慣れているようだ。体軀も見たところしっかりしているし、昔は同じような仕事をしていたのだろうか。

「銃を降ろせ」

「……わかりました」

社長に言われたので、渋々銃口を地面に向ける。俺としてはまだ相手を信用するに足るだけの要素が存在しないので、安全装置もかけず、しまいもしない。相手がナイフの達人でも、銃のほうが早いだけの間合いを保っているし、早撃ちの達人だとしても、銃を取り出す動作を見せた瞬間に撃ち殺すことができるように。

「まあ、面識もない相手を信用できない。これは普通のことです。ですから、身分証明書と社長直筆のサインを持ってまいりました。どうぞ、ご覧ください」

そんなものがあるなら先に出せ、と思いながらも口には出さずに、二枚の書類を受け取る。それが霧沢社長の直筆だということを確認して、念の為にボディチェックも行う。武器を持っていないことが確認できてから、銃をしまう。

「ご無礼を失礼しました」

「かまいませんよ。さあ、こちらに車を待たせてあります。ついて来てください」

若干の警戒を残しながらも、黙って老人についていく。その間も、周囲への警戒を怠らない。

空港の外。玄関からすぐ近くにVIP専用の駐車場があるだが、そこには今の時代、もうほとんど見ることも無くなったガソリン車が駐車してあった。

「旧ニッサンのGTR。骨董品だな」

「一世紀前の車。大丈夫でしょうか」

俺は少なくとも、ギリギリ貧乏人ではない。が、言うほど金持ち

でもない。そのため現在では完全に金持ちの道楽の品と成り下がったガソリン車についての理解は浅い。この車が一世紀前の物ということくらいは知っているが、それほど前の物ともなれば、事故を心配するのは当然のこと。

「霧沢社長ご愛用の車種です。外觀とエンジンこそ旧式ではありますが、毎年車検もしていますし、エアバッグ、自動減速機、自動運転も自社製の最新のものを採用しているので安全については心配いりません。どうぞご安心を」

「なるほどな。では頼むぞ」

社長は止める暇もなくさっさと車に乗り込んでしまったので、自分も仕方なく車に乗る。ガソリン車とは、実用性重視の霧沢らしくないものを持ち出してくる。今では化合物の混じった水を電気分解して、それをピストンにぶち込んで反応させてタイヤを動かす車が主流だというのに。

「……」

まあ、それでも昔は走っていたんだ。点検、整備もしていると言った。走っていて突然爆発するなんてことはないだろう。少しの心配は残るが、大人しく乗るか。

二人の社長

見上げれば頂が見えず、空にまで届きそうな超高層ビル。の隣にある純和風の屋敷の敷地に、俺と社長は居る。

「社長、キリサワ重工業の本社は隣のビルではないのですか」

自分の居る場所は、民間人の家屋の間違いではないのかと思い、社長に尋ねる。すぐ隣のビルの玄関には、「霧沢重工業株式会社」と大きく書かれた看板が掲げられていた。なのになぜ、すぐ隣りの民家に。

「いや、こっちで合っている。そろそろ出てくるはずだ」

社長がそう言うと同時に、地面に大きな影が現れる。驚いて上を向くと、隣のビルから巨大な物体が降ってきていた。

地面に落ちる寸前でスラスターで減速し、熱風と共に砂埃を舞い上げながら着地したそれを見て、低出力のEMPグレネードと、フラッシュバンの安全ピンを抜く。数少ない弱点の、カメラを潰すためだ。

警戒していると、肩を叩かれて振り向く。

「いつもの歓迎だ。警戒しなくてもいい」

「わかりました」

物騒な歓迎だが、まさかこれが日本流の歓迎なのか。もう少し華やかな、黒髪美女の出迎を期待していたのに、まさかの製品の見せつけか。

『ミス・エレンとその補佐君！　ようこそ日本へ！』

肩に武器の代わりに搭載されている大きな外部スピーカーから、まるでヘビメタのライブ会場の中に居るかと錯覚させるような、近所への配慮など欠片も感じられないような大音量に思わず耳を塞ぐ。

「……キラサワ。毎回ではあるが、もう少し大人しい歓迎の仕方はないのか」

予想外の、毎回発言。こんなありがた迷惑な歓迎を社長はいつも受けていたのか。胃が痛くならないのだろうか。きつと痛くなっているのだろうが、いつもの鉄仮面で過ごしているのだろう。

『我々は何に対しても絶対に手を抜かない。これも客を飽きさせないための真心だということを理解してほしい』

「何も知らない部下が驚くだろう」

『それに関しては慣れてくれと言う他ない』

自社の社長と霧沢社長の対話により、これから自分がこのような歓迎を受けることになることを知り、胃が痛くなる。

「あなたが霧沢重工業社長、霧沢敬之ですか」

『その通り。よく知ってくれているね。それと、敬語は使わなくていい。もう少しフレンドリーにこうじゃないか』

「……………」

もう少しマトモな人間だと思っていたのに、実物は頭のネジが数本いかれているとは驚いた。どう対応したものか。いつも通りに対応すればいいのか、それとも見下した対応をすればいいのか。

「相手がいいと言ってるんだ。遠慮するな」

「そういうわけにもいきません。本人確認のため、顔を見せていただいてもよろしいでしょうか」

『もちろんいいとも』

ASのヘッドパーツが開き、まばらにヒゲの生えた男性の顔が顕になる。手元の写真と見比べて、本人かどうかを再確認する。

「間違いなく、私本人だろう？」

「そうですね。間違いありません。私の事は、説明しなくてもご存知かと思いますが」

「当然。社長補佐兼愛人としてゴシップ誌に引きぬかれた大物だから、知っていないと失礼じゃないか」

顔を一瞬だけしかめるが、すぐに平静を取り戻していつもの真剣な表情に戻る。相手は六大企業の一社の社長。失礼は許されん。多少の無礼は許してくれそうな相手だが、それでもこのスタンスは絶対に崩さん。

「愛人というのはデマです。社長とは一度たりともそのような関係を持ったことはありません」

「そうだ。私とこいつはそういう関係ではない」

必死で弁明するも、霧沢はあまり信じていないのだろう。返事すらない。

「その話は今は置いておこう。それよりも、フォレスト社を潰した事について、じっくりと聞かせてもらいたいのだが？」

「もちろん。今日はそのために来日したのだからな」

「よろしい。屋敷の中へ入ってくれ。他四社の社長も勢揃いしてい

るから、きつと長くなるだろう」

「はぁ．．．．．」

その言葉を聞き、大きく溜息をつく彼女。内心は察するが、それが己の判断の招いた結果なのだから責任をもって義務を果たすべきだろう。もっとも、計画に賛同し、作戦の要として行動した自分が言うことではないが。

「そうか…わかった。覚悟はしていたが、面倒くさいことになりそうだ」

嫌そうな顔で屋敷に入る彼女だが、義務は果たしてもらう。でなければ、自分の首が物理的に危ないのだから。果たさないのであれば、社長の座は譲ってもらう。

「．．．．．」

「さ、二人とも、各企業の代表達がお待ちだ」

霧沢社長がASから出てきて、さっさと歩けとばかりに背中を押す。心の準備くらいさせてやれと言いたく並んでもない。

彼女は触れられることをあまりよしとせず、数歩押されてすぐに自分で歩き出した。俺もその後ろについて歩くが、査問会の結果がどうなるかが少し心配だ。

査問会（前書き）

シリアス？ いいえコメディです

査問会

円形に作られた大きな机に、各企業の代表六人と、それぞれの補佐官六人計十二人が座っていた。ちょうど、アーサー王伝説の円卓と同じ人数。

この場において、武器を携帯している人間は俺も含め一人として居ない。

『諸君、これより査問会を始める』

場を仕切るのは霧沢敬之。日本語での発言だが、それぞれの企業代表には、それぞれの母国語に翻訳された言葉が耳に入る。

この場ではすべての言葉が発言と同時に翻訳されるようになっていたので、わざわざ翻訳者を間に挟む必要がなく、この中の誰かが漏らさない限り、高い機密性が約束されている。

『一週間前のことだが、その彼女、エレナ・ポリスが規約違反を理由にフォレスト社を攻撃。軍を用いて主要施設を強襲し、さらに株価の操作で倒産まで追い込んだ。おかげで七社だった我々の会合は、六社に減ってしまった。これについての詳細は、手元にある資料を見てくれ』

普段なら余裕の笑みを浮かべているエレナ社長だが、この時に限ってはそんな余裕はなく、いつになく神妙な顔をしている。

この査問会の結果によっては、自分の会社が倒産させられるか乗っ取られる可能性すらあるのだから。俺にとっても重要な事で、この査問会がどう終わるか非常に気になるところだが、彼女のその気持ちは自分の比ではないだろう。

各企業の代表の表情をよく観察し、どのようなこと思惑があるのかを予想するが、それを顔に出すようなヘマをする人間は居ない。さすがに世界の頂点に立つ企業のトップがそのような馬鹿では、会社も成り立たないだろう。

どうでもいいというような顔をしているアメリカ代表企業、アンブレラ社社長。

何がおかしいのかわからないが、笑顔を浮かべているロシア代表企業、ボルシェヴィキ社社長。

自動翻訳を切り、資料を手に中国語で部下と相談している中国代表企業、大華公司社長。

かなり厳しい表情でうちの社長を睨みつけるアラビア代表企業、フォーマルハウト社社長。

『何か質問は』

霧沢社長のその問に対し、一本だけ手が上がる。フォーマルハウト社の社長だ。キツイことを言わなければいいのだが、それは望むべくもないだろう。嫌がらせの言葉でも、ストレートには言わずキツイ皮肉で心をえぐりに来るに違いない。

『なぜあの会社を攻撃したのかね？』

と、思っていたら意外とそうでもなかった。そんな事はお手元の書類に書いてあるだろうに。何のために昨日飛行機の中で報告書まとめてパソコンについてたと思ってる。

少しイラッとしながらも、相手の表情を伺う。先ほどと変わらず

怒り心頭、顔が真っ赤だ。

『手元の資料を見ればわかるはずだが』

『私は彼女の口から聞きたいのだ。君は黙っていてくれ』

『とのことだ。回答したまえ』

席を立ち上がり、フォーマルフアウト社の社長を正面から見据える俺の飼い主。緊張しているのか俯き加減だが、メンタルは弱いのか。普段の気丈な性格はどうしたのだから。

少し後ろに立っていたのを、一歩前に出て横に並んでささやく。

「代わりに話しましょうか」

「いや、いい。私の責任だ。私が果たさずにどうする」

その提案も下げられたので、元の位置に下がる。チラリと見た程度だが、下がる前に見た表情には、先ほどの緊張した雰囲気は見られず、いつもの堂々とした偉そうな表情が戻っていた。

「あの会社は、以前結んだ条約の互いの活動の邪魔をしないという内容に対し、ここ数年で30件以上もの妨害工作を行っていた。この行為は明らかに条約に違反しているので、我社の損益をこれ以上出さないために攻撃した。証拠も資料に書いてある通りだ」

『対話で解決するという手段は取れなかったのか』

母国語では怒鳴りつけるように喋る言葉が、全て翻訳され、重要な点だけを自動的にピックアップして全員の耳に入る。さすがに、怒鳴り声をそのままヘッドホンを通して耳に叩き込むわけにもいかないという、開発者の配慮だろう。ありがたいものだ。

「私も対話で解決しようと何度も試みた。しかし、相手側はは決定

的な証拠がないのでそれに応じず、やむなく新たに起きた開発工場爆破の犯人を捕縛。尋問した結果、一連の妨害工作が全てアーサー元社長の指示によるものと証言したため、攻撃に踏み切った」

『攻撃する必要がどこにあった』

「以前ここにいる全員と、アーサー元社長で決めた条約の内容を忘れたのか。」

二社間でどちらかが相手の利益を著しく損ねることがあった場合、攻撃することを許すという記述があっただろう。だからそうした」

『・・・・・・・・』

「ここに貴社のサイン、拇印の入った書類と、当時の様子を収めた映像ディスクのコピーがあります。ご覧になりますか？ 不要ならば不要と仰ってくださいればそれでかまいません」

自分もその条約に賛成して、さらにその証拠を出されては黙るしかないフォーマルハウト社の社長。そこへさらに、予期せぬば所からの追い打ちがかかる。

「時代遅れの石油で動く兵器を買い取ってくれてた会社が潰れて残念だったな。これからはおとなしく後進国に安値で売りつけて、せいぜい富を貪るといい」

皮肉たっぷりにアンブレラ社の社長がつぶやく。本人は聞こえないだろうと思ってつぶやいたのだろうが、M A D E I N J A P A Nのマイクは非常に優秀で、そのつぶやきを拾って通訳し、各企業の代表の耳に入れてしまった。

『植民地から成り上がった国には、あの会社がどれだけ我々に貢献したかわからないだろう！』

「なんだと・・・・・・・・テロリストを生む宗教を信仰する野蛮人が合衆国を侮辱するな！」

『双方口を慎むように。ここは話し合いの場であって、抗争の場ではない。どうしても争いたいなら専用のリングを用意する。そこでお互い納得するまで殴り合ってください』

『「黄色の猿が口を出すな！」』

「.....」

霧沢の表情が、穏やかなものから一瞬で険しいものに変わる。実際には眉をしかめた程度だが、それだけその些細な行為には、大きな感情が含まれている。

「ポチッとな」

「「!？」」

彼が手元にあるスイッチを二つ押すと、言い争いをしていた二人が急に座席から飛び上がり、そしてすこし立ち眩んだ後、床に膝を付き、そのまま倒れた。両社の補佐官は何事かと慌てて脈を取り、瞳孔を確認する。が、ただ寝ているだけと理解すると途端におとなしくなった。

『何をしたの?』

ヴォルシェヴィキ社の社長、アンジェリカが尋ねる。彼女はフォレスト社への攻撃行動よりも、こちらの方が興味が有るらしい。

『即効性の麻酔薬で少し眠ってもらった。一時間もすれば目を覚ます』

それぞれの椅子には少し仕掛けがしてあり、席に座る人間があまりに目に余る行動をとった場合には、手元のスイッチで何らかの措置を取ることができる。という説明がされた。

この場合は、麻酔薬の入った注射を尻に突き刺して眠ってもらった、ということだろう。場合によっては毒薬を仕込むこともあるのだろうか。恐ろしいことだ。

「場を鎮めるのに最適な方法だった。評価しよう」

『褒めてくれるのは結構だが、本来の目的を忘れず、査問会を続行しよう。お二方、何か彼女に質問は』

残る二人に尋ねる。しかし、手は上がらない。

『私からは何も』

『同じく。ああ、そうだ。あの会社のASを一機サンプルとして回収させてもらったが、何かまずい事はあるだろうか』

『いや、何も問題ない。うちもやってるしな。で、他にはもう無いか?』

そう尋ねるが、どこからも手が上がらない。もともと、床でいびきを立てながら寝ている社長二名は、意識がないので尋ねたいことがあっても尋ねられないだろうが。

『何もないなら、今日はこれで解散しよう』

さて、査問会も終了したことだ、今日の夕食は何を食べようか。

俺は会社が存続する限りは会社の利益に尽くすという契約を結んでいるが、危機に対して能動的に動くことはまずない。俺の専門は武力を用いての問題解決であり、対話での交渉、問題解決は仕事の外でできないこともないが。

「ふう…終わったか」

「社長。夕食は何にしましょう。やはり日本に来たからには、カレ

「ライスですか？ 本場インドのものよりも美味しいと聞いていますが。しかし寿司も捨てがたいですね」

さっきまでの緊張した空気を一撃でぶち壊した。二名除く全員の視線が、自分に突き刺さる。まともに対応する気もないので、両手を上げて呆けてみせる。

「………… お前は、私が何をしに日本まで来たと思っている」

呆れ半分、怒り半分で、分かりきったことを尋ねられる。

「査問会です。しかし、それは私の領分ではありません。私の仕事は、通常の仕事である敵の排除、社長の身辺警護に加え、今回命令された食事や宿等を手配すること。違いますか？」

「食事は完全にお前の趣味だろう」

「人生において限られた回数しか食べられない食事で、少しでも美味しい物を食べたいと思うのは当然です」

「公私混同はするな。馬鹿者」

少しだけ助けられた、というような表情を浮かべた彼女だった。図らずとも、相手を癒すことができたようで何より。

『ユニークな部下をお持ちね。うちのと交換してもらえないかしら』

「悪いが、こいつはロシア語が喋れないんだ」

『いえ、話せます。ビジネス会話でも日常会話でも』

少々ヘタではあるが、それでもまともなロシア語での発言に思わず振り向く社長二人。二人ともかなりの美人なのだが、どちらに就くかは個人の好みで異なるだろう。

一つ言くと、ヴォルシェヴィキ社の社長の方が若い。

「……………なぜ黙っていた。いや、それ以前にいつどこで習った」

「前者の質問は、聞かれなかったからです。後者の質問は、以前ロシアの女性と交際してたことがあって少し勉強しました」

『へえ、給料はどのくらいもらってるの？』

『月三十万ユーロですが、弾代十万とメンテナンスで五万。税金六万、各種保険で一万、あと家族への仕送りが給料一万差し引かれるので、実質七万程度です。最近は物価が何もかも高くなっているのだから、でたまりません』

これでも普通の仕事をしている人間からすればかなりの高収入なのだが、かなり危険の伴う仕事だということを忘れてはいけない。

『じゃあ弾代とメンテナンス費は負担するから、月二十万でうちに来ない？』

『一応契約もあるのでそう簡単には移れませんが、なんとかしましょう』

「おい待て、何を勝手に話を進めている。こいつの代役が務まるような人間はそう居ないんだぞ」

『優秀な人材は、どこの企業も関係なく欲しがるものよ。取られたくなかったらしっかり信頼の鎖で繋ぎ止めておくことね』

普通の会社からすれば、リスクと仕事の量を換算してもかなりの高待遇。しかし、さらに良い待遇で迎えると言われては断る道理もない。社長との煩わしい契約がなければ、彼はすぐにでも尻尾を振ってついて行っただろう。

『これは私の連絡先。気が変わったら連絡ちょうだい。また明後日、市場権利の再分配会議で会いましょう』

いち早く部屋の外へと出て行った彼女を、俺と社長は見送る。片方は非常に真剣な表情で。もう片方は、敵を見るような顔で。

「社長。契約破棄していいですか」

「却下だ阿呆。あんな小娘のどこがいい」

「弾代とメンテナンス費用を負担してくれるところでしょいか」

「ロシアは寒いぞ」

「山岳地方出身をなめないでください」

「まあ、どうあっても貴様は手放さん。それだけは覚えておけ。貴様は、我社にとって看板に等しいのだからな」

「看板なら付け替えられます」

二人の様子を傍から眺めていた霧沢は、後にこう部下にこう語ったという。

何あの夫婦漫才。もうあいっすら結婚すればいいのに。

実際二人は互いを信用し、信頼し合っているが、それが恋愛感情に変わることはおそらくないだろう。喧嘩するほど仲がいいとは言うが、それはあくまで友人としての仲。恋愛とはまた別だ。

社畜の一時的帰宅

日本での査問会と、新商品についての会議も終わり、国に帰る。ついでに以前は仕事が入って無しになった休暇ももらい、久々に実家に帰ることにした。

山岳部にある、この22世紀においても未だに自然がほぼ手付かずの形で残っているド田舎。そこにある豪邸が、俺の実家だ。

玄関にはメイド服に身を包んだ四十代ほどの女性が一人。柔和な笑みを浮かべて迎えてくれた。

「坊ちゃんお帰りなさいませ」

「もう坊ちゃんって呼ばれるような歳じゃないさ。母さんは居るか」

「買い物に出かけられました。それも自家用のヘリで」

「そうか……」

自家用ヘリ、という言葉聞いて顔が一気に暗くなった。当然だ、自家用のヘリなんて、以前は無かったのだから。

また自分の知らない間に高いものを買っていると考えると、頭が痛くなる。

「そういえば、坊ちゃんにはお伝えしてませんでしたね。奥様、この前借金を返したと思ったらヘリポートを作ってヘリを買ったんですよ。おかげでまた借金ができてしまいました」

「あのババア……」

昔から浪費癖であるということはわかっていた。前はダイヤモンドを買って、その前は新車を買って、さらにその前は別荘を買って、その前は……もう覚えてない。

だが、この次元まで来ると浪費癖という言葉では済まされない。一度病院かどこかにぶちこんで、金を使わせないようにさせようか……いや、何度も失敗してたな、そういえば。金の無駄か。ぼんやりとしか覚えていない父が逃げ出したのも、母の浪費癖に耐えかねて逃げたんだろう。

「今月の給料もまだ頂いていないというのに。他のメイド達も嘆いておりました」

「わかった………母さんにはキツク言っておこう」

いつそ死んでもらったほうが……いや、それだけはできん。どれだけ煩わしくとも自分の親。育ててもらったのだから、その恩に報いなければならぬ。殺すなどもつての外。絶対にその選択肢は取れない。

「給料を払っていただけなければ、私共メイド一同、別の就職先を探さなければなりません」

「それは困る。お前らが居なくなったらブレーキが居なくなる。総額いくらだ」

「一人二千ユーロとして、二万あれば足りるか」と

二万でも辛い。もうすぐ新商品も出る。出たら強制的に買わされることになるので、金は可能な限り貯めておかなければならないからだ。

しかし、ここで払わなければ母親のブレーキが消えて、財布事情はかなり厳しい物になるので、結局払うしか選択肢はないか。

「わかった………わかった払おう。今度からは、母さんが何か買おうとしたらまず俺に連絡をくれ。止めさせろと言ったら気絶させてでも止めてくれ」

「かしこまりました。お食事はいかがなさいますか？」

「夕食だけ頼む。それと、俺は部屋で寝る。七時まで起こさないでくれ」

「疲れてます？」

「・・・・・・相変わらず鋭いな」

「私は坊ちゃんがまだヨチヨチ歩きのと時から世話をしているのですよ？ わからないはずがありません」

日本では査問会で余計なことを言ったせいで社長の買い物に付き合わされたり、ホテルで書類仕事を押し付けられたり、帰国の際の飛行機では延々と愚痴を聞かされたりで休まる暇が無かった。結局土産も買い損ね、使った金は食費だけ。仕事だというのはわかってるが、あまりに過酷だった。この三日の睡眠時間は合計でたった三時間、一日一時間しか寝ていない。労働基準法違反にもほどがある。

そして一週間後には新商品^{AS}のテストをしなければならぬ。座布団に詰められた綿のようにビッシリと書きこまれたハードスケジュール。寝れるときに寝ておかないと、確実に過労か不注意で死ぬ。

「ごゆっくりお休みください。と申し上げたいところなのですが、今日は妹様も居らっしゃいます。あまり静かには休めないでしょう」「そうか。あいつが居るのか」

ようやく休める。そう思ったが、現実には優しくないようだ。その理由は、妹の性格にあるのだが、それはまた本人が出てきた時に。

「帰る時期を間違えたなあ」

「そう仰らずに。ご自分の妹でしょう」

「起きたら相手する。そう伝えといてくれ」

別に妹を避けているわけではない。ただし、タイミングが悪いだけだ。疲れていない時なら話でも何でもしてやるが、速やかに睡眠を取らなければいつ倒れてもおかしくない状態で相手をして、要らぬ心配をかけたくない。

「かしこまりました。妹様は東棟の自室かホールに居らっしゃいますので、今日は西棟の客室でお休みください」

「ありがとうございます。そうさせてもらうよ」

西棟と東棟は、本館を隔てて向かいにある。もし彼女が自室で休んでいれば、まず会うことはない。玄関ホールで待ち構えていれば、アウトだが。

「坊ちゃん」

「なんだ」

「あなたの今の仕事の給料が非常に良いのは理解しております。そのおかげで奥様がいくら浪費しようとも私たちが路上で生活しなくてよいのも理解しております。しかし坊ちゃん、あなたの命は金には変えられないのです。ですから・・・」

「危険な仕事はやめてくれ。か？ 耳にたこが出来るほど聞いたが、何度も言うように無理だ」

「その通りでございます。あなたが死ねば皆が悲しみます。せめてもう少し安全な仕事をしてください」

「社長との契約もあるし、ガキの頃から訓練受けて戦場に立ってるんだ。簡単にはやめれないし、やめたとしても他にできることがない。話はこれだけか？ 終わったなら休ませてくれ」

「・・・ええ、話はこれだけです。しかし、私は諦めませんよ。坊ちゃんが折れるまで、何度でも説得します」

「好きにしてくれ」

荷物をメイドに預け、あまり確かではない足取りで屋敷の門をくぐり、しばらく歩いて玄関の扉を開ける。

扉を開けると、シャンデリアの光で照らされた玄関ホールにはよくわからない調度品の数々が並んでいた。身の丈ほどはある大きな壺や、奇妙な仮面、それと漆塗りの鞘に収まった刀。最後のは絶対高いに違いない。日本刀なんて、今の時代では消滅寸前の美術品。今まで給料から捻出してきた仕送りは、またこんな訳のわからない物達に使われていたらしい。

「・・・・・・・・さっさと寝よう」

左へ曲がり、西棟への通路を歩く。時折壁にぶつかりながらも、少しずつ、少しずつ休息にむけて頭の中は不鮮明になっていった。見かねたメイドが肩を貸し、西棟まで歩いて行った。

玄関のメイドとはまた別のメイドに肩を借りながらも西棟の客室の一部屋に辿り着き、そのまま部屋に入って靴を脱ぎ、ベッドに倒れこむ。久々に訪れた確実に休める時間を噛み締める間もなく、一瞬で眠りに落ちた。

社畜と妹

時刻は夕方。まだ日も暮れていないような時間帯。彼はダブルベッドで一人静かに眠っている。夢はめったに見ず、泥沼の中で溺れるように寝て、寝ぼけながらも時計のアラームで目を覚ます。

「・・・・・・・・眠」

体は怠く、重い。頭も大分ボヤけていて、周囲の状況を見て少々混乱する。

なぜ自分は家に居るのか。社長に仕事を押し付けられていたはずだ、と。

しかしすぐに自分で家に帰ってきた事を思い出し、柔らかく温かいベッドから名残惜しげに離れる。

「ふはああ・・・・・・・・あ、飯の時間、だな」

大あくびをしながら時計を見ると、時刻は午後七時。この家では午後七時から夕食が始まる。それまでには食卓に出なければいけなかったのだが、半年ぶりに帰ってきた彼はその事を時間の経過と溜まり溜まった疲労で完全に失念していた。

「食事は・・・・・・・・用意してくれてたか」

小さなテーブルの上に置かれた、いかにも消化に良さそうな食事を見てつぶやく。彼が疲れていることを配慮してメイドが作ってくれたのだろう。それをさっさと平らげて、ベッドから立ち上がる。

「下に、降らないとな」

靴を履いてフラフラと部屋をでる。家に帰ってくるのは半年ぶり。つまり、家族と会うのも半年ぶり。

おそらくメイドが彼のことを話しているだろうから、行かなければ確実に自分の部屋にカミカゼよろしく特攻してくるに違いない。そう思い、まだあまり確かではない足取りでリビングまで歩く。

彼の記憶が確かなら、この時間帯、妹はリビングで紅茶を楽しんでいるはずだから。

「ただいま、ヘンリエッタ」

「あ、兄さん生きてたのね。死んだとばかり思っていました」

ブロンドの髪に、青を基調としたワンピースがよく似合う少々毒舌な少女。ヘンリエッタが、彼の妹。歳は十六。まだ学生だ。

「半年ぶりに家に帰ってきた兄に対しての第一声がそれか」

「半年の間一度も連絡を入れないんだから、死んだと思って当然です」

「勝手に殺すな」

冗談にしては少々怖いような気がするが、これがこの家の普通。そんな事でいちいち怒っているのは、キリがない。

「こんな平和な国でも、何週間か前にテロがあったんですよ？ 兄さんはただでさえ都会に住んで、いつテロに巻き込まれて死んでもおかしくないんだから、死んだと思ってても自然だと思います」

「テロ？」

「知らないんですか？ フォレスト社って会社が標的になったあの事件」

「……ああ、あれか。思い出した」

表ではテロ扱いになっている、フォレスト社への報復作戦。実行したのは他でもない彼で、命令したのは社長なのだ。知らないはずが無い。最近は少し忙しくて頭から抜けていただけだ。

「それに、兄さんお金を入れるだけで仕事の内容は一切教えてくれませんかから、余計に心配になります。いい加減に何をしてるか教えてください」

「書類仕事とか、茶を入れたりとか、雑務をこなしたりだな」

「嘘言わないで下さい！」

バンツ、とテーブルを叩いて立ち上がる彼女は、今にもキレて暴れだしそうな顔をしていた。

「ただの書類仕事やお茶汲みくらいで、私の学費と母さんの浪費癖、それとメイドの給料を賄えるだけの給料が貰えるはずないでしょう！」

「嘘は言っていないぞ」

そう、嘘は言っていない。全てを話していないだけ。

「なら仕事はそれだけじゃないんですよね。何をやってるか全部話してください」

「俺の会社での立場は、社長補佐。立場に見合った給料を貰うのは当然だろ？」

命を張って戦闘の矢面に立ち、常に命の危険に晒される対価として、社長から莫大な報酬と妹の学費の援助を引き出している。そんな事を話せば、彼女は確実に会社へ、いや、社長に直接抗議しに行

くだろう。それがわかっているから、あえて話さないという選択をした。

「中学すら行っていない兄さんがそんな重役に就けるはずないでしょう！ それと、社長補佐だっというならどこの会社に勤めてるのかくらい教えてください！ 私たちは家族じゃないんですか!？」

「……………黙っててすまなかった、実は俺養子なんだ」

「……………え？」

「だから、お前とは血が繋がってない。黙ってて悪かった」
「嘘、ですよ？」

突如としてとんでもない事実を明かされた彼女の顔は、混乱の一片で塗りつぶされ、何を言えいいのかわからない、そんな様子だった。

しかし、それに対して彼はというと…………

「勿論、真っ赤な嘘だ。騙して悪かったな」

「…………喧嘩売ってるんですか？」

「まさか、かわいい妹に傷をつけるような事をするはずないだろう」

少々無理矢理ではあったが、話題をそらすことに成功して満足気な笑みを浮かべている。真上からの照明も相まって、実に清々しい笑顔だった。同時に非常に腹のたつ表情でもあったが。

「わかりました。買いましょう。いくらですか」

「売ってない売ってない。早とちりするなって」

「なら一度殴らせてください。それで許します」

椅子から立ち上がった彼女の目は、兄への怒りと闘志でこれ以上無いほどに輝いていた。ただし、その表情は間違っても淑女のすべ

き顔ではなかったが。

「それだけで許してくれるなら、安いもんだ。遠慮無く殴ってくれ」
「……兄さんにそんな性癖があったなんて、幻滅しました」
「誤解してるみたいだが、そんな異常性癖は持ち合わせてないぞ」
「いえ、兄さんが変態だということは重々理解しています。ですから、兄さんは私からの怒りを存分に受け止めてください」
「怒りは受け止めるが、愛情は遠慮したい」

それから数十分後。ひどく顔を腫らした兄と、とても上機嫌な妹がリビングから出てきたところをメイドが目撃し、少々話題となったが、それはまた関係の無い話だ。

社畜と家族

屋敷の大きさに見合った、無駄に広いロビー。天井にはシャンデリアが吊り下げられ、それは夜中だというのに煌々と光り、ロビーを隅々まで照らす。

その明かりの下に、俺と妹のヘンリエッタ。そして二人の母の三人がラウンドテーブルを囲んで座っている。俺の妹は、俺の顔を見るなりすぐに申し訳なさそうに俯いて、数分経った今もそのままだ。母は鼻を突く香水の匂いを撒き散らし、仮面のように分厚い化粧をして、醜く顔を喜びの形に歪ませている。

「今日は愛しの息子が半年ぶりに帰ってきてくれたということ、パーティーを開くことにしたの！ どう、素敵でしょう？」

高く、キツイ声と、非常に高いテンション。そしていつも付けている匂いのキツイ香水が彼女の特徴。やはり、以前会ったときから何も変わっていない。ブクブクと醜く肥え太っている割には、自分が未だに昔の美貌を持っていると勘違いしている。俗にいうかわいそうな人だ。

悲しいが、こいつこそが他ならぬ俺の母親であり、最も嫌いな人間だ。

「・・・母さんが自分の稼いだ金でしてくれるなら、素直に喜べるのにね」

「どうでもいいから寝させろババア」

家の財布とも言える俺と、実質母親ではなく、俺に養われている

ヘンリエッタは冷たい視線を母親に向ける。視線に込められた意図は両者とも違うが、良い感情が一欠けらも混じっていないのは確かだ。その視線を受けておいて、嫌われていることを自覚しない母親の、なんと鈍感なことか。

「エツタ、そういう言い方は良くないわ。クロード、あなたは誰にむかってババアなんて言ってるの？ 家に帰ってこれなくするわよ」
「てめえだよ。ずいぶん偉そうだな」

「母ですもの」

その一言で、母に向ける視線がより冷たくなる。しかしそれを意に留めず、また口を開き、俺たち兄妹の反感を買う。狙ってやっているのなら、人を苛立たせる天才だ。

「そうそう、クロード。あなたまた口座に入れるお金減らしたですよ。おかげでまたメイドに給料を払えなくなったじゃない」

その言葉を聞き、さらに怒りが増す。口座に入れる額は減らしていないはずなのに、この醜い豚を世話し続けるという生産性のない行為を行なっているというのに、この女は堂々と己に責はないと言いはった。

「……いい加減に「母さん、そう言うなら少しは節約してください。普通に生活するだけならあんなにお金はいらないはずです」

俺の発言を遮って言われた事は、実にもっともな意見だが、それは果たして母の耳に入っているのか。いいや、入っていないだろう。いつもと変わらぬ問答だ。結果がわかっているだけに、虚しく、苛立たしくもある。

「そりゃあ、昔よりは少しは増えてるわよ。けど生活するお金はあればあるだけ、楽しい生活ができるでしょ？」

「確かにその通りだが、息子の稼いだ金で生活してる人間の言うことじゃないだろう」

「……母親への恩を忘れるような子に育てた覚えはないけど、どうしたのかしらね」

「受けた恩は忘れてないが、返した恩の方が多すぎやしないか？」

世の中金だと悟っている俺にとっては、恩と金はイコールで結ばれている。つまり幼少期に、自分が受けた恩は、利子をつけて金で返す。しかし、いくら利子が高くても、今まで自分が返してきた金はお釣りが来る。それこそ、彼女がどのような行為をしても、内臓や血液をすべて売り払ったとしても、とても返せる額ではない。それを理解して言っているのだろうか。

「そういえばさっき家に帰ってこれなくするって言っていたな。別に俺は帰る必要はない。母さんに金さえ渡さなければ、一月の給料で家くらい買える」

家を買えるほど、というのは流石に嘘だ。工費や人件費なら問題なく足りるが、税金や維持費がかかればギリギリで足りない。まあ、それにいざとなれば社長に世話になればいい。弾薬費や税金などで収入はかなり減るが、自分一人生活する分には、かなりの贅沢ができる。それこそ遊び呆けていても、金が尽きない程度には。

「あなたねえ……うちにお金がなくなったら、エツタはどうするの」
「本人の了承さえあれば俺が面倒を見る。誰かさんと違って浪費癖なんてないし、何の問題もなく養える。バカ高い学費も社長に払ってもらってるしな」

そこで、名案が浮かぶ。妹が受け入れてくれれば、これ以上母の浪費癖のせいで苦しむこともなくなる画期的な案だ。

その案はメイド達にとっては働く場所がなくなるも同然なので、あまり選ぶべき手段ではない。それでも、メイド長の口座に直接振り込めば平等に振り分けてくれるだろう。

「そうだな。いい機会だ。絶縁しよう、母さん」

「え？」

「兄さん正気!？」

二人が目丸くして驚き、彼の発言を疑う。それもそうだろう、何の前触れもなく自分の家族が母親に対して絶縁を提案するなど、世界中どこを探してもかなり珍しい事案だ。

「正気じゃなきゃ、こんな事は言わない。エッタ、ついてくるか? こないなら……今後一切学費の援助はなしだ。全て自分でどうにかしろ」

いくら身内に甘い俺でも、我慢の限界はある。許容量が大きいだけで、一度限界を迎えれば溜まっていたものの全てが流れだす。ダムが決壊して溜まっていた大量の水が下流の町を押し流すように、不満が相手の意見を封じて流す。

「ちょ、ちょっとクロード、どうしてそんなこと言うの? 母さんのどこが悪いの?」

メス豚が甲高い声でキィキィと鳴く。みつともなく、醜い。こんな女の股から生まれたとは、認めたくないものだ。

「言ってもいいのか?」

「言ってくれないとわからないわよ!」

耳に障る、甲高い声。昔はカナリアのような、と言われるような美声だったのかもしれないが、今では完全に豚のソレだ。

「自分に非があることに気づかずすぐにヒステリーを起こすその性格。何度言っても直そうとしない浪費癖。焦ったときのその甲高い声。ピザみたいな体型。香水のドギツイ匂い。センスの欠片もない髪型。服装。自分は稼ぎもしないくせに人に金ばかりたかるのも気に食わない。そのくせプライドだけは人一倍だ。あとはやけに多い食費。最後に男好き。今日もどうせ買い物行くとか言ってまたホストクラブに通ってたんだろう? 言い換えるなら憤怒、怠惰、虚飾、強欲、傲慢、暴食、色欲。キリスト教の七つの大罪全部とその他生理的嫌悪だ。わかったかブタ!」

いくらかは自分ではどうしようも無いことも混ざっているが、自力でどうにかできる事が大半。そうでないことは、ヘリー機買うだけの金があればどうにでもなる。最後の一言は余計だが、怒りに身を任せての発言なら仕方ない。そう自分に言い聞かせて、思い切って吐き出した。

「わ、私は、ブタなんかじゃ……」

「豚でないと主張するのなら、行動で示してみろ」

「行動で示せて、そんなのわからないわよお」

俺は子供の頃から兵士として育ったため、どうも軍人精神のようなものが少しだけある。寝ていたところをたたき起こされたストレスが雷管に、怒りが炸薬に、母の軟弱な言葉がトリガーとなって、その少しだけの部分が弾丸のように押し出された。

分かりやすく言うと、ブチ切れた。

「そんなこともわからないなら貴様はブタよりもはるかに下だ！
クソに湧くウジムシですらまだ気品があるぞ！」

「に、兄さん？」

「母さんわからないわよお……」

広い屋敷の全ての部屋にまで聞こえそうな大声。普段は大人しい俺からは考えられないほどの怒りの表情と大声に驚き、ソファアに座ったまま立てなくなったヘンリエッタ。怒りの対象となり、混乱している母親。だがそんなこと、知ったことか。

「貴様は母ではない！ 母と認めるには醜すぎる！！ 認められたければその腐れた脂を削ぎ落とせ！！ そうすればウジムシにランクアップしてやる！！」

「ひどいわクロード……」

「文句があるのか！？ あるなら聞こう！」

絶対に拒否できないことを逆手にとった、卑怯な命令。自分の息子が切れて、こんな命令をするなど、一度も想像したことがないのだろう。しかし、しかしだ。キャパシティの非常に大きい俺にこんな行動を取らせてしまうほど無茶な事を言い、反省もせず、甘えるだけ甘えてきたのは他ならない俺の親。自業自得と言ってしまえばそれまでだ。

「とりあえず、そうだな。運動しやすい服装に着替えて屋敷の外周を十……いや、五週でいい。五週だ！ 今すぐ！」

「え、む、五週なんて無理よ！」

「黙って行ってこい！」

道端に転がる犬の糞を見るような目で睨まれ、怯え、すくみ上がる母親。

「^{黙れ}Shut up! Get out here—《出て行け》
!^{おこおこ}Hurry up!」

「ひっ!?!」

床をダンッ! と大きく踏み鳴らして威嚇。すくみ上がって動けない母親に喝を入れ、ロビーから追い出す。相手の沸点の限界を見誤り、自分の行いを反省しなかったのが俺が切れた理由だった。もっとも、自分の吐いた暴言も反省すべきものではあるが。

「さて……寝るか」

「兄さんはいつからハートマン軍曹になったんですか……」

「さあな。おやすみエツタ」

妹の問に対して、精一杯優しい顔をして答え、そして就寝の挨拶を告げる。

「おやすみなさい、兄さん」

返事を聞いてから、自室に戻る。溜まっているものを吐き出す気分というのは、実に爽快なものだ。

社畜と家族（後書き）

主人公が軍曹と化していますが、これは寝ようとしていたところをたたき起こされた不機嫌ゆえです。

社畜の休日

朝の街。田舎だが、寂れているというわけではない。むしろその逆で、道は通学途中の学生で適度に賑わっている。家にいるよりもずっと、故郷に帰ってきたという実感が持てる。

その学生たちに混じって、彼は街道を歩いている。妹に腕を引っ張られながらという、御世辞にもカッコイイとは言えない姿で。

女子生徒からはなぜか黄色い歓声を浴びせられ、男子生徒からは妬みの視線で見られ。針のむしろというほどではないが、居心地は御世辞にもいいとは言えない。

「エツタ」

「なんででしょう」

「公開授業だからといって、俺と一緒に登校する必要は果たしてあるのだろうか」

「もちろんあります」

どんな理由だ、と眠気混じりの目で尋ねる。アイキャッチで上手く意思が伝わるのは稀だが、果たしてうまくいくのか。

上手く行けば口に出す必要がないので、素晴らしい次世代コミュニケーションションだろう。一種のテレパスと言っても過言ではないかもしれない。そうすると、目の見える人間は皆超能力者か。素晴らしい時代になったものだ、非常に馬鹿らしい事を考える。

「無能でどうせもてない可哀想な兄さんに、私が如何に異性に好感を持たれているかを見て欲しいからです」

「残念ながら俺は無能ってほどでもないし、モテないわけでもないぞ。自分で言うべきことじゃないが」

知らないというのはあまりにも残酷だ。俺は残念ながら無能ではない。一応、交換可能とはいえ会社を動かす大きな歯車の一つとして機能している。間違っても無能ではない。

それを自分から言い出せないのは少々悲しい物があるが。

「口ではなんとも言えます。まともに学業を納めていない兄さんに、私の優秀さを見て挫折していただきたいのです」

「そんなに自分の成長した姿を見て欲しいのか？」

小さく「このブラコンめ」と呟くと、腕を全力でつねられる。上辺は笑顔だというのに、なかなか凶悪な素顔を隠している。このくらいの強かさがあれば、社会の荒波に揉まれても十分自分を持って生きて行けるだろう。

「私は兄さんの学力がどれだけ底辺に位置するかを、自分で認識してもらうために連れて行くんです」

「ハハ、それは楽しみだ」

学校へ行ってないだけで馬鹿と決め付ける。それはあまりよろしくない事だ。学校に行ってなくても、会社で五年間ほど英才教育ですら生温い教育をうけてきた。否、受けさせられてきた。社長直々の命令で、訓練もしつつ仕事もしつつ、毎日毎日わざわざペンで紙媒体に書きこんで提出して、指が疲労骨折するほど勉強してきた。そこらの学制に負けることはないさ。

「笑い事じゃありません。学力が無ければ、この時代は負け組として生きて行くしかないですよ」

「なら俺は勝ち組だ。知力財力両方揃ってる」

「さっきも言いましたが、口だけならなんとも言えます。お金も

出所不明ですし、借金でもしてるんじゃないですか？」

「そんなわけあるか。全部自分の給料から『PULLLL! PULLLL!』……すまん、ちょっと電話だ」

会話の最中に電話が鳴る。ポケットから携帯を引っ張り出し、小さなディスプレイを見る。番号を見れば、緊急時以外にはまず掛かる事のない、社長のオフィスの番号。相手は無論、社長だろう。勝手にオフィスの電話を使用するなんてことはない。

かかってくるのは緊急時のみ。かけてくる相手は社長のみ。そして自分は社長補佐。要件はといえば、一つしか無いだろう。

「また仕事か」

ため息を吐きながら、電話に出る。

『クロード、悪いが休暇は取り消しだ。今回は拒否権はない』

妹の授業見学と家族とのコミュニケーションに費やすはずだった休暇は、今回も仕事に費やすこととなった。有給休暇すらまともに休ませてくれないとは、なんというブラック企業だ。

「やはり、昨日のメールの件でしょうか。私が居なくとも、さして問題はないと思ったのですが」

『既にそちらにASを積んだへりを向かわせている。それに乗って直接現場に迎え。さっきも言ったように、拒否は認めん』

聞くつもりなしか。最悪だな。ますますもってブラック企業だ。そんな会社勤めている自分も自分だが。

まったく、重役は辛い。

「わかりました。また後でかけ直すので、状況の説明はその時に。休日出勤分、報酬は上乘せしておいてください」

電話を切る。居場所がわかっているのは、宇宙に浮かぶ人工衛星によるサーチによるものだろう。または、知らない間に発信機が付けられていたか。携帯電話に仕込むなんて、また古典的な方法だ。

「兄さん、さっきのは」

「悪いが、お前の授業風景の見学は無しだ」

「今日は休暇じゃなかったんですか？」

「道理が通じないことも色々あるんだよ。大人には。休日でも出勤しなきゃならないことも、当然あるさ。ブラック企業なら尚更な」

そう言ったところで、社長の言っていた迎えと思しき軍用ヘリが五機編隊で上空に出現した。その内の一機が上空から降りてきて、電線にひっかからない程度の低高度で搭乗用のロープが投下される。周囲の人間はは通常ならありえない奇妙な事態に驚き、何事かと騒ぎが起こる。当然、妹も例外ではなく、突然の出来事にあっけにと取られていた。

「母さんの事、よく見といってくれよ。少しでもトレーニングをサボったら、サンドバッグにしてやれ」

俺は投下されたロープをつかみ、そのまま引き上げられる。何か重大なフラグを立てたような気がするが、気のせいだろう。

「じゃあな。生きてたらまた帰ってくる」

混乱する妹を放置して、ヘリに乗り込む。秘密を打ち明けられない

いのはなかなか、辛いな。

「出してくれ！」

「了解！」

ヘリのプロペラの回転速度が高まり、そのまま急上昇。高度を上げて編隊に追い付いたところで、社長に回線をつなげる。自分が今何をすべきかを聞くために。

工場奪還 前編

地表よりも遙か高く、上空を飛行するヘリ。ライトは消しているが、時刻は昼。いくら上空を飛んでいても、その容貌は目がいい人間ならはつきりと見て取れる。目がそれほどよくなくとも、何かが飛んでいることくらいはわかる。

そのヘリの中で、俺含む社員達はASに身を包み、今回の仕事についての事を静かに聞いていた。

『今回の任務は、工場を占拠している敵グループ。おそらくは、フォレスト社残党でしょう。これを排除してください。相手は社員を人質にしているので、可能ならば救助してください』

可能ならば、ということは不可能ならば人質ごと排除しても構わないということだろうか。もしそれが社長の決断ならば、社員らの忠誠は大きく揺らぐことになるだろう。俺は金さえ払ってくれば、一定期間中は忠誠を誓うけどな。

『犯人らの要求は不明。占拠しているながら、未だに何の声明も出していません。フォレスト社残党と判断した理由は、監視カメラにフォレスト社製のASが使用されていたからです。現段階で確認されている敵戦力は、重装備の歩兵が十。AS五機。戦車二台。戦闘ヘリ三機。対空車両が三台です。これはあくまでも最低限の戦力であり、これ以上の戦力を保有していることは間違いないでしょう。注意してください』

一施設を占拠するには明らかに過剰な戦力。会社を潰されたことに対する報復行為だとしても、あまりに非効率的。嫌がらせの他に、

何か目的があるのではないかと思わせるような戦力の一点集中。

それを考えていても口に出さない。自分の仕事はあくまでも問題の武力解決。それに、その疑問は誰もがわかっていると思ったからだ。

『説明は以上です。幸運「レーダーに反応。一番機、二番機、そっちでは確認出来てるか？」』

オペレーターの声を遮り、増幅されたパイロットの音声が機内に響く。

『こちら一番機。一肯定だ《Affirmative》』

『こちら二番機。同じく』

ヘリの操縦者が叫ぶ。その声で、機内は一気に戦闘の空気になる。各自でASの兵装ロックを解除する。

ヘリのレーダーとリンクし、反応した物体が表示される。

「ヘリか？ やけに小さいが、無人機ならあり得るか。データ検索開始……^{Unknown}該当機体無しだよ！」

『こちら二番機、まずいロックされた。予定降下地点にはまだ遠いが、ASを投下して撤退す』

撤退する。おそらくはそう言おうとしたのだろう。言い終わる直前に、二号機がコックピットを吹き飛ばされ、パイロットを失ったヘリは落下を始めた。本来なら爆砕ボルトによって吹き飛ばされるメインローターが、緊急脱出装置が作動せずに回転を続ける。ヘリから脱出し、落下傘を開いた者たちはそれに巻き込まれ、哀れにもヘリと共に地表へ真っ逆さまへ落下していった。

「緊急事態だ！ 一号機！ ミサイル！」

『了解！ ちくしょう、何が幸運をだ！ 開始早々最悪じゃねえか！』

まったくだ。作戦開始早々、ついてない。生きて帰れるだろうか。

「野郎ども、投下するぞ！ 舌嚙むなよ！」

「了解！！！！」

外部電源が切断されてからヘリの床が抜け、支えを失った機体は重力に従い落下を始めた。ヘリ一機につきAS五機が搭載されていたが、三機の内一機が落とされたため、ASの総数は十。予定と違い、任務に支障が出る可能性が高くなったが、実戦は何が起こるかわからないもの。みんなよく訓練された兵士だとは思うが、こういった事態にも速やかに対応できるように訓練されているのだろうか。

「敵視認！ ありやASか？ なんであんなのが空飛んでんだよ！」

『知るか！ 戦闘機じゃないなら落とせるだろ！ フォックスス？！』

小型の、けれど対ASには十分な威力のミサイルがヘリから発射され、敵ASに向かって音速の数倍の速度で直進する。しかし、それは当たる直前で相手が真横に急な回避運動を取ったために回避される。近接信管なので、至近爆発で大きなダメージ受けていたようだが、撃墜には至らなかった。

至近爆発を受けて墜落しないとは、なかなか丈夫だな。それとも当たり所が良かっただけか？

落下傘でゆっくり降下しながら、相手をズームして見る。肩に載せられた独特な形をした砲。それが帯電し、バチバチと火花を放つ

ていたのを見て、ヘリのパイロットはかなり焦った。既に手遅れかもしれないと思いながら、大声で叫んだ。

「レールガンだ！ 一号機、回避しろ！！」

『わかってる！』

両機とも機体を横に平行移動させて、回避運動を取る。しかし回避しきれずに一号機はメインローターの羽を破壊された。折れた羽が遠心力であさったの方向へ飛んでいき、機体はバランスを崩し始める。

『^{ファック}畜生！ 脱出する！！』

緊急脱出装置を作動して、メインローターが爆砕ボルトで吹き飛ばされる。その後コックピットのキャノピーも吹き飛び、座席が真上に射出され、パイロットは無事に脱出する。

「クソが、死にやがれ！」

三号機がミサイルを一発放つ。さっきので大きなダメージを負っていた敵は、今度は回避できずに直撃。木っ端微塵に吹き飛び、鉄片が地面に落下していく。それを見届けながら、自分たちも地面に降りた。

「ヒーハーツ！ やってやったぜえ！」

「こちらAS部隊。無事着地できた。作戦エリアにはまだ遠いが、援護たのむ」

「おう、任せろ！ ヘリの三機くらい、軽く落としてやらあ！」

仲間の仇を討って気分がいいのか、大きすぎる大声で返事をする。

一方、地上部隊はというと。

「ヘリが二機もやられたのはかなり痛いな」

「そうっすねー、別働隊の二機は対地装備しか持ってきてなかったと思うんっすけど、相手には戦闘ヘリが三機も居るって言ってたっすよね？」

上空を飛ぶヘリの武装で、ヘリを相手にできる武装は、空対空ミサイルが七発、バルカンが一門。それプラスフレアがいくら。最初は三機で三機を相手にして、下から援護射撃を行う予定だった。しかし、一機対三機ではすぐに落とされる。俺もみんなもそう思い、全く期待していなかった。

「とすると、私たちはかなりマズイ状況にありますね。ヘリを落とせるような武装を持ってきたのはクロードさんと私だけですけど、ASじゃ探知される前に攻撃しないとこっちが不利です。ECMは持ってきてますけど、あまりアテにはできないかと」

二メートルほどの長さの砲身を持つレールガンを肩に載せているのが、俺の機体。対空ミサイルを複数背中に引っ付け、今しゃべっている女性の機体。

後の八機は全て二十ミリ機銃と120ミリ無反動砲、グレネードランチャーとミニガンで統一されて、判別がほとんどつかない。一機だけ、目立つエンブレムを付けている場違いが居るが、真っ先にやられるだけなので放置されている。

「そうだな。だが、命かける対価に金を貰ってるんだ。退くわけにはいかない」

「どーするんすか？」

「破壊する予定だった対空車両を一台だけ奪取して撃ち落とす」

「無茶っすよ！ 戦車が居るんっすよ！？」

「他に案があるなら言ってみろ」

確かに、ASと戦車では圧倒的に戦闘力に差がある。装甲にしろ火力にしろ、すぐれているのは機動力のみな彼らでは、戦車という強力な護衛の付いた対空車両など奪取できるはずがない。正面からではまず無理だ。

「そうか？ ミサイル背負ってるお前、名前は」

「ラム・ライムです」

「よし。ラム、そのミサイルで戦車は撃破できるか」

「不可能ではありませんが、ロックできる距離まで近寄らないければなりません。衛星とリンクはできませんから、座標指定で打ちっぱなし、というわけにも…」

「誰か陽動が必要か。じゃあ、そのエンブレム付けたお前。社長補佐命令だ。俺とラム以外で三人選んで連れて行け」

「はあ！？ ふざけてんのか！」

顔こそ見えないが、スピーカーから聞こえる声から推測される年齢は十代後半といったところ。口のきき方からして、不良崩れだろう。

上司に対してあんな口答えをするなんて、こいつの教官は一体どんな指導をしていたのだろうか。上官の命令には絶対服従するように調教するのが教官の仕事だろうに。

「大層なエンブレムをつけているくせに怖いのか？ まあいい。誰だって戦車相手は怖いだろう。ただ、俺に対してあんなことを言っただんだ。減給は覚悟しておけ「ふざけんな！」陽動すらまともにこなせないなら邪魔なだけだ。そのくせ上官に口答えして減給を拒否

するような権利があると思ってるのか？ 臆病者で、甘ったれで、世間知らずのクソガキは家に帰ってママのオッパイでも吸ってろ」

「チ、チキンだど！？」

「罵られて悔しいか？ 評価されなくて腹が立つか？ だったら敵を殺せ。成果を出せ。お前の実力を見せてみる。そうすれば認めてやる」

「……」

「ほかに行きたい奴はいるか？」

「俺が行こう。金貰って働かないのは、主義に反する」

「素晴らしい心構えだ。社員の鏡だな。社員ナンバーは」

「256723」

「256723だな。よし、覚えた。あと、そうだな。お前とお前とお前」

適当に三人選んで指名する。名前は呼んでないが、指さしで指名したので呼ばれたのはわかるだろう。

「行ってこい、給料アップのチャンスだ」

「「了解！」」

「衛星とのリンクを確認。各自、敵の配置図は受け取ったな？」

全ての機体と情報共有が正常に行われているのを確認し、スラスターに点火する。

「作戦開始。各自、武器のロックを解除。気を引き締めてかかれ」

人体でいう足の裏についているローラーを回転させて、スラスターの補助を得て一気に時速百キロ近くまで加速。十機のASは、地面を削りながらそのまま敵に占拠された工場まで突き進む。敵をぶち殺すため、工場を奪い返すために。

空は雲で覆われているが、日はまだ高い位置にある。その下を、陽動の四機を除く六機は戦車を側面から攻撃するために、また、少しでも空中からの目視での発見を避けるため、少々足場の悪い雑木林の中を、トラップを見つけては回避しつつ、静かに行軍していた。戦車だと森の中を木々を引き倒しながらなので、こう静かにはいかない。これもASの、ひいては小型人型兵器の利点の一つである。しかし、だからといって敵が気づかないかというと、そうではない。気付かれても騒がれるよりも早く、先手を打っているから。川に潜む獐猛な鰐が、野生動物に悟られずに近寄って、一撃で狩るように、ASもセンサーで敵を発見し、視界に入ったところで、騒がれる前にサブソニック弾を使って射殺する。音速以上のスピードでは飛ばないので、響くのは火薬の燃焼する極小の音だけ。周りには気付かれず、一人、また一人と敵の数は減っていく。

そんな中で、一人だけ血走った目で敵を探している隊員が居た。

「敵の集団……見つけたっすよお、まとめて狩ってやる」

残りの敵歩兵が、十人ほどだろうか。すこし離れた位置にたまっていた。それを見つけたエンブレム付が、突っ込もうとしてスラスターに点火する。それを止めようと少し小さな声で命令を出す。

「待て」

「いいや、こんなチャンスまたあるもんか。やってやらあ！」

「待てっつってんだよクソガキ！」

自分らしくもない大声。命令違反は、部隊全員を死なせる危険性がある。見過ごせはしない。故に出た言葉だろう。

「ルッセエ！ 黙ってろ！」

静止の声を聞かず、上司である俺に対し暴言とも取れるような言葉をつき、敵集団に突撃していく馬鹿。反抗的な態度と、機体に描かれている派手なエンブレムで、誰かは一発でわかる。

「ウオラアアアアアア！」

「な！ ASだと！？」

「クソ、撃て撃て！！」

敵集団のど真ん中に、対人兵装を乱射しながら突っ込む。敵も黙ってやられるわけもなく、苦し紛れに小銃を撃つが、歩兵の持つ小銃弾などASにとっては豆鉄砲と同程度の威力しか無い。有効打も与えられず、次々と撃ち殺される歩兵達。十秒と経たぬ間に、集まっていた敵は全員殺される。あっさりと、ろくな抵抗もできぬままに血の海に沈んでいった。

頭をかかえるが、時すでに遅し。

「この、クソガキが！ 命令無視してなに突っ込んでやがる！」

「いいじゃないっすか。役に立ってって言ったのはアンタツしょ？」

「役に立てとは言った。ああ、確かにそう言ったさ！」

「ならいいじゃないっすか」

依然上司に対する態度がなっていないエンブレム付。態度がでかくせに、命令に従わない。センスがあるようにも見えない。本人は役に立て、性能を見せろと言われて、それに応じて行動しただけなのだろうが、指示を聞かないのはかなりの大問題だ。そのせいで、一斉掃射で一名除く全員を一度で殲滅して増援を呼ばせず、同時に

敵戦力を聞き出すという目論見も失敗に終わった。

「それ以前の問題だ！ 敵を発見したらまず指示を待て！ 命令通りの行動をしろクソガキ！ 教習所で習わなかったのか！ ああ！？」

「悪かった、悪かったつすよ！ 謝るつすから！ 以後このようなことがないように気をつけます！ これでいいっしょ！？」

「謝って済むかクソボケが！」

「あんな短い間で応援なんて来ないつすよ。頭大丈夫すか？」

「てめえの頭がイカレてんだよ！ 応援呼ぶのには三秒ありや事足りる！ 絶対ヘリが来るぞ！」

ヘリ、と聞いて全員の動きが一度に停止する。ヘリはASの天敵だ。いくら対空装備を付けていようと、相手からすれば地を這う俺たちはいいいでしかない。対空装備を積んでいるので、撃墜は不可能ではない。不可能ではないが、確実に少なからざる被害が生じる。

「陽動部隊に連絡をいれろ。ヘリを撃墜するまで待機しろとな」「了解」

部下に指示する。自分が直接連絡しないのは、衛星から情報を受信し、それを元にしたヘリの進路の予測。レーザガンへの電力供給。弾道の予測、表示。さらにIRジャマー、ECMの起動などい計算能力を割いているため、量産型のASに搭載されている低スペックなCPUではこれ以上のシステムを起動できない。起動したとしても、フリーズが熱暴走を起こす可能性が出てくる。

「衛星からのデータ転送を確認。ヘリが一機こちらに向かっている」

送られてきたデータには、工場のヘリポートから戦闘ヘリが一機飛び立ってこっちに向かっているという事が書かれていた。

やはり、思ったとおりだった。

「ラム・ライム、ミサイルの誘導システムを自動から手動に変更。管理権限を衛星に移せ。指示があったらすぐに撃て。衛星が誘導してくれるよう設定した」

「わ、わかりました」

「他の奴は方位210、射角15度に弾幕を張るようにしとけ。ミサイルの迎撃用意。二十秒以内に準備しろよ。敵は一分あればここに来るからな。あと迎撃失敗時のために散開用意」

「「了解」」

全機が大急ぎで用意をすすめるが、それでも一分という時間制限はかなり短い。

あっという間に敵機がレーダーに写る。そこからレーダ上に小さな点が現れ、こちらに向かって直進してくる。

「ミサイル！ 迎撃開始！」

俺とラム除く全機、四機分のミニガン掃射が音速を超えるスピードのミサイルを歓迎する。ミニガン一つでも、分間四千発という圧倒的な発射速度を誇るというのに、それが四機分だ。弾『幕』というよりも、その密度はもはや『壁』に近い。

その壁にぶつかり、ミサイルは命中すること無く空中で爆発し、一時的に視界を塞ぐ。しかし、今の時代に目視で敵を撃つなんて原始的な攻撃は行わないので、意味はない。

反撃としてレールガンを撃つ。超高電圧を纏った砲身からプラズマの尾を引いて吐き出される砲弾は、先程のミサイルよりもさらに

早いスピードで敵へりに迫り、装甲を貫き、命中した場所の反対側から抜けて、そのまま空へと消えていった。

「命中を確認。が、撃墜には至らず。再発射までは残り二十秒」

装甲にでかい穴を開けられたというのに、いまだにしぶとく飛行を続ける戦闘へり。運良くエンジンを外したらしい。

「ミサイル、撃て」

今度は敵ではなく、隣からミサイルが発射される。そのミサイルはレールガンの直撃から体勢を立てなおしている最中のへりをたやすく捉え、それに向かって一直線に進んでいく。

対してへりは、再度ミサイルを全弾発射して、その後ミサイルにやられて爆発、そのまま墜落していく。

敵が放ったミサイルは先ほど一発撃墜したので、残りは七発。その七発に対し、再度弾幕で対応する。

何発かは撃ち落としたが、やはり今回は数が多く、撃ち漏らしがあった。

しかも、それが別々の機体に向かっている。

「後退しろ！」

ほとんどの機体は、命令にしたがって後退し、木の後ろに隠れたりしてミサイルに対応する。しかし、一機だけ命令に従わなかった奴がいた。

「あ、当たんねえ！ 助けてくれ！！」

やはり、エンブレム付だった。一機で頑張って弾幕を張ってはい

るものの、さっきのミサイル撃墜は四機分の火力があつたからこそ。たかが一機で、特にセンスもないのに、落とせるはずもなく、哀れにもミサイルの直撃をもらい、爆散した。

「素直に命令を聞けば、生き残れたかも知れないのにな」

「でも、聞いてても死んでたかも知れません」

「まあな。まあ、ちょうどいい厄介払いができた」

どのみち、指示を聞かない阿呆は必要ない。そう考え、何事もなかったかのように残り稼働時間を確認し、進軍を再開した。

次の標的は戦車。載せている機銃は、どこ製かによって威力は異なるが、ほぼ間違いなくASの装甲を凹ませるくらいの威力はある。一発で凹み、二発で貫通。それが連射で襲ってくるのだから、恐ろしいと以外形容できない。

できれば素通りしていききたいところだが、そうもいくまい。

工場奪還 後編

陽動部隊が敵戦車二台の注意を引き、俺とラム・ライムの同時攻撃でタイムラグなしで破壊。その後対空車両を奪取し、対地装備のヘリが到着するまでに敵のヘリを撃墜。余裕をもって工場を奪還する。そういう作戦だった。

「理解に苦しむな」

「そうですね」

しかし俺たちの前にあるのは、陸戦兵器では最強であるはずの戦車二台……何らかの方法で撃破されたのだろう、全く動いていない。それと、機銃と戦車砲の攻撃を受けたと思われる、大破したASが一機。

陽動部隊が交戦したという通信はない。しかし、地面には弾痕や榴弾の炸裂した跡が大量に残っていて、それなりに派手な戦闘を行ったという証拠がハッキリと示されている。

「ふむ……予想より遅かったな」

陽動部隊として三機の僚機をつけさせた社員が戦車の後ろから出てきた。見たところ、損傷はほとんど見当たらない。戦車を相手にして損傷はほぼ無しとは、恐ろしい戦果だろう。

「指示したのは陽動のはずだが」

破壊された戦車は、どれも目立つ損傷はなく、外装は軽く凹んだものばかり。だが、天板から煙が出ているため、ハッチをこじ開けるか吹っ飛ばすかしてそこから榴弾を叩き込んで撃破したのか。

戦車を撃破したのは褒めてやりたい。しかし、待機命令無視、交戦の報告をしないなどの行為は、追求せずにいられるものではない。ASの通信装置が音声通信のみでよかった、居間の混乱した顔は上司として見られたらまずいものだしな。

「どうして報告なしに交戦した」

「申し訳ない。うっかり敵に発見されてな。報告してから交戦して
いては死んでいた」

「そうか。以後報告を欠かすな」

「了解」

命令無視は、やむを得ない状況で、今回は良い方向に作戦が進行した。今は死んでいる馬鹿のように、命令無視して突っ込んだ挙句、想定外の消耗をしたわけはでない。それに、臨機応変に対応し、最小の被害で敵を撃破した事は評価に値する。そう思い、今回のことは大目に見ることにした。

「対空車両の奪取はできているか」

「ああ。ASが二機護衛についてたが、狙撃で落としてある」

「上出来だ」

戦車と対空車両は破壊。残る主な脅威はヘリのみだが、地上からの攻撃でヘリを落とすのはなかなか難しい。前の一機はこちらの装備が相手に知られていなかったため運よく撃墜できたが、残りはそうではない。仲間が落とされたということで、こちらが対空装備を運用していることは既に相手には知られているはず。かなり警戒されているだろう。高度を上げられ、ECMとフレアをまかれたら、地上からの攻撃は大部分が無効化され、あとは袋叩きがオチだろう。

「頼れるのはヘリと対空砲だけか」

「対空砲とヘリ一機で戦闘ヘリを二機相手にするなんてバカげてると思います。どこぞのゲームじゃないんですから」

「確かに。まったくもってバカげてる。だが、やってもらうしかない。対空砲の射手と護衛二人を置いて工場の奪還に向かう」

機体の向きを工場に向け、各種センサーを起動する。会社の看板に泥を塗ってくれた阿呆共にはそれなりの制裁を加えないといけない。弾薬費と修理費はいつも通り報酬から引かれるだろうし、面倒なことこの上ない。

しかしそれでもやらないといけないのが、社員の辛いところ。

「それなら人質を解放するように交渉すべきではないのですか？状況としては、こっちが有利なわけですし」

「交渉で済むなら俺達と呼ばれることはない。俺達と呼ばれた時点で、交渉って選択肢は既に消えてるんだよ。嬢ちゃん」

少し歳を食った人間独特の、落ち着いた声。その声に他の兵士たちも頷く。人体の動きがそのまま機体にトランスされるので、多くのロボットが首を縦に振るといってもシュールな図となる。

彼女の言っている事は確かに正論だ。しかし、正論がいつも通るほど世の中は甘くない。今回、人質の社員は『可能なら救出しろ』と言われている。しかし、可能か不可能かの判断はあくまでも現場の人間が下すもの。有能な人間なら、書類や状況証拠などはいくらでもでっち上げれる。よって、生殺与奪の権利は彼らが全て任されている。この仕事をやっていながら、それがわからないほど臍抜けでもないだろう。

「そういうことだ。社員の命は確かに大事だが、それよりも『たかがテロリストすら潰せない企業』というレッテルを貼られるのを回

避する事のほうが大事だ。人質には悪いが、最悪テロリストと運命を共にしてもらうことになるかもな」

人命を軽視する企業、というレッテルを貼られるのもあまり良いことではないが、テロリストを逃がすよりはいい。他所の企業からなめられて、市場を横取りされるよりはマシだ。会社の利益は自分の給料にそのまま反映される。

「さて、俺は工場に入るとして、ラム・ライムは対空用に残す。あと二人。残りたい奴は」

社員たちに尋ねると、あまり間をおかずに手が一本上がった。戦車を破壊した陽動隊の一人だ。

「残弾数が心もとない。残らせてくれ」

「なら対空砲の射手をしろ」

弾が少ないのに下手に前線に出られて、弾切れで足手まといになられても困る。そうなるより、弾を全て工場奪還部隊に回してもらい、対空砲の射手に専念してもらう方がいいに決まっている。

「了解！」

「他に居ないか」

「彼が残るなら私も」

間髪入れずに手が上がる。さっきは手を上げていなかった奴だ。もしか、恋仲か。まあ、そうであってもなくても死んでもらいたくないことには変わらない。貴重な社員が死ぬのはあまり良いことでもないしな。

「まあ、天国で挙式せずに済むように気をつけろ」

「なぜ来週挙式するのを知っているんです？」

まさか、マジだったとは。こういう時は、どう言えればいいんだ。お幸せに、か？ 式には呼べよ、か？ わからんな。上司はこういう時の対応の仕方まで覚えておかなくちやならんのか。

「雰囲気でわかる。ともかく死ぬなよ」

「もちろんです」

「わかってる」

威勢のいい自信に満ちた返事を聞き遂げてから、ここに残る三人以外を引き連れて工場に歩を進める。

しかし、今日の俺に目をつけられたテロリストは、運が悪いとしか言いようがないだろう。本来なら今の時間、街で適当な女性を口説いて買い物をする予定だった。それを台無しにされた俺は、今非常に機嫌が悪い。本来ならその怒りの矛先は社長に向けられるべきなのだが、この場にはいないので、仕方なく事件を起こしてくれたテロリストに向けることにしている。

まあ、所詮八つ当たりだ。虎の尻尾を踏んだと思って諦めてもらおう。

工場奪還 後編（後書き）

戦闘は今回で終了です。奪還の過程は、作者の力量不足により書くことが不可能でした。申し訳ありません。

工場奪還 終編

一緒に連れてきた社員たちを二人一組に編成しなおし、余った一人は屋上のC班に放り込んだ。で、残りの二班は正面と、裏。その三班に分けて突入体勢を取らせる。トラップは、無いこと自体が罠かと思わせるように、一つも無かったので、作戦の第一段階は非常にスムーズに進行した。しかし、問題はここからだ。いかにして人質を奪還し、我々もできるだけ損耗を抑えてテロリストを殲滅するか。これが課題。おそらく、人質全員無傷に、とはいかないだろう。死者は確実に出る。それを承知で、社員たちは突入の時間を待っている。

「作戦内容をもう一度確認する。即興の作戦で穴はあるかもしれないが、それは各自の判断で埋めて欲しい。質問されて返す時間はない」

『了解』

『了解』

『了解』

通信機を通した声が三つ聞こえる。穴が埋められるかどうかは、各自の腕にかかっている。結果によっては最悪クビになるかもしれないが、自分の部下を信用しなければ。

「人質の位置は二階の中央ホール。まずC班が天井を爆破し、それを合図に全班突入。C班は少し派手に暴れて敵の注意を引いて、A、B班はできるだけ見つからないよう静かに二階のホールへ向かう。もし見つかったら騒がれる前に始末。俺たちA班が人質を確保し、護衛しつつ撤退。人質を確保したら、B班はC班の援護に向かえ。突入5秒前。4，3，2，1」

『突入！』

屋上から爆発音が聞こえ、それを合図に簡易ステルスを起動して工場内部に突入する。トラップの類は見受けられないので、後ろを班員に警戒させつつ通路をまっすぐ走り階段を目指す。この図体で、しかも屋内で隠れようなどと馬鹿なことは考えない。隠れても見つかると、見つかった瞬間に相手を始末できるようにするべきだ。そう言う内に…

「a o t a i j s u g o ! ?」

通路を走っていると、わけのわからない言葉で叫ぶ男、おそらくテロリストだろう。それに出くわした。都合のいいことに進路上に居たので、勢いを落とさずに体当たりして轢き潰す。AS越しに肉が潰れ、骨の碎ける嫌な音が聞こえて、さっきのテロリストは物言わぬ人の形をした肉塊になり通路の脇に跳ね飛ばされ、少し転がって壁にぶつかり停止した。

生きていたとしても、人間より一回り大きいサイズの鉄塊の体当たりをまともに食らったのだから、そう長くは持たないだろう。通路脇に転がる肉塊には目もくれずに、二階のフロアにつながる階段に向かう。

非常用階段の入り口で一旦停止し、敵、トラップの有無をセンサーで見る。

「敵1、トラップなし。気味が悪いくらい無警戒だな」

ここまで来ておいて、トラップは森の中だけ。戦車とヘリがあるから工場の中にまで攻め入られるとは思ってなかったのか…：あり得るな。あれだけの戦力を突破できるはずがないと、たかを括っているのかもしれない。ただ、中にはまだASも居る。それを処理でき

ないことには警戒を緩めるわけにはいかない。

「B班と同時突入、すぐに人質救助と敵の殲滅行動に移る。射角は水平に固定しておけ、間違って社員を撃ったら事だ」

「なぜ水平に？」

「人質といったら縄で縛られて床に転がされているもんだ。多人数ならなおさらだ」

もしかすると盾にされて立たされているかもしれないが、その場合はご愁傷様。悪いが合意も事前通達も無しにだが、生存は諦めてもらう。おそらくそれはないだろう。人質を取っているフロアの至近にまで俺たちが近寄っていることを知られていなければ、そんなことに労力を割くとは思えない。

まあ、工場そのものに突入していることは知られているので、状況が逼迫した、所謂どうあがいても絶望という状況下で、思考や行動が暴力的な方向へ傾くのは自然なこと。そしてそのような思考傾向ですぐ近くに人質という絶対的弱者が存在すれば、それを痛めつけることで自身が優位な状況にあると錯覚することで精神の安定を保とうとするだろう。で、人質を取れるということは手に武器があるということ。その状態で武器を手放すことは考えにくいので、使うとしたら手でなく足。取る行動は蹴る、踏む。そのためにわざわざ人質を起こすこともまた考えにくい。

よって、そう判断した。

「B班、こちらA班。突入の準備は完了した。そっちはどうだ」

『こちらB班、突入準備はできている。いつでもいけるぞ』

「了解。5秒後に同時突入、閃光弾で敵の動きを封じた後水平射撃で掃討に移る。遅れるな。4、3、2、1、突入！」

扉を蹴破り、スタングレネードを放り込む。閃光と爆音がそれな

りに広い空間の中に響き渡り、突然のことに棒立ちになるテロリスト。それを対人機銃の水平掃射で片端から撃っていく。狭い空間に、さきほどのスタングレネードほどではないが、非常に大きな音が継続的に響く。悲鳴は銃声にかき消されて全く聞こえない。位置の関係で、味方の射撃も自身に当たるが、対人用の口径を使用しているので装甲を貫通することではなく、せいぜい少しへこむ程度で弾が落ちる。

数秒ほど掃射を続け、硝煙や砂埃で悪くなった視界の中に立っている者が居なくなったのを見て、それぞれ射撃を停止する。

「あ、あんた達はポリス社の人間か？」

血や肉や骨や内臓やらが飛び散った床の上に、縄で縛られた状態で倒れている十数名の男女の内、一人のそこそこ歳のいった男性が声に出して尋ねてきた。機体に搭載されたAIが自動でデータベースにアクセスし、顔の認証を行い始める。数秒と待たずに結果が出て、この男性は工場長だと判明する。

「そうだ」

「俺達を助けに？」

「……いや、この行動そのものは当初の作戦内容には含まれていません。あなたたちを助けにきたのは、独断での行動です」

会社側の提示した作戦内容では、人質の救出は工場奪還のオマケのようなものに過ぎず、優先度は低かった。つまりこの行動は俺の独断であり、後ほど処分を受けても不思議ではない。他の奴らへの口止めはしっかりしておかなければ。始末書程度ならいいとしても、減給はなんとしても避けたいところだ。普通に生活する分には問題ないのだが、妹の学費やメイドの給料、メンテナンス費用、税金等々で色々と出費があり、それほどいい暮らしはできていない。減給

などされたらたまったものではない。また社長に借りを作るハメになるのは勘弁だ。この前金を借りて、返済する代わりにマッサージを頼まれた時には正直理性が飛びかけた。襲って出来ちゃいましたなんてことになってみる、パパラッチの魔の手から逃げ続ける生活が待っているに違いない。

冗談ではない。今の生活でも胃薬が手放せないというのに、さらにこれ以上のストレスが加わってみろ、胃に穴が開く。

そういえば、強いストレスを受けると胃粘膜の液体分泌が停止し、胃の内壁が胃酸にさらされることになるそう。そして胃に穴が開くのに要する時間は、二、三秒程度らしい。関係ないな。

「B班はこのフロアの出入り口を警戒。敵が来たら始末しろ」
「了解」

ひとまずこの場において適当と思われる指示を出し、作戦の次の段階へ移る。

「工場長、治療が必要な者、治療が必要ではないが移動が困難な者は居るか」

「あ、ああ。さっき抵抗して足を撃たれたのが一人。応急処置で止血はしてあるが、誰かの助けなしには歩けないだろう。あとは、基本的に軽傷者だけだ。移動に支障はない」

「了解した。死者は」

「……制圧される際に、二人な」

「わかった。遺体は事が終わり次第回収し、丁重に葬儀を行おう。今は脱出を急ぐぞ、別の班が上でドンパチやって気を引いてる内は比較的安全だ」

外は安全かどうかは知らんが、多分敵戦力の撃破は完了している

だろう。敵が武装ヘリ二機に対して、対空ミサイル砲台と化したA Sが一機、武装ヘリ一機、対空砲が一門、その護衛のA Sが一機。戦力としてはわずかに多い。

「これより人質を工場の外まで護送する。お前は俺と一緒に来い。」

B班はC班の手伝いに行け」

「了解」

「了解」

B班の二人が上の階へいく階段を登っていくのを見てから、自分たちも行動を開始する。

「皆さんは私についてきてください。出口まではほんの百メートルほどですが、負傷者がいる分移動速度は落ちます。しかし、外に出るまで絶対に走り出さないように。緊急時は走らずにその場に伏せてください。うっかり前に出られると誤射するかもしれません。わかりましたか。では、行きますよ」

返事を待たずに振り返り、入ってきた扉を開いて、機体の手だけ扉の向こうへ出す。階段に敵が居ないかを指の先についたカメラで確認。敵が居ないことを確かめてから踊り場に出て、階段を跳んで下の階まで一気に降りる。

一階の階段ホールと、通路をつなぐ非常扉を開け、また手だけ出して敵の有無を確認。空いている方の手を上げて階段を降りてくる工場員達を制止する。

「敵発見。数は2、両方A Sだ」

「両方始末できるか？」

「問題ない。と言いたいが、少しきつい。まあ、やってみよう」

背中に載せている武器は30mm砲とレールガン。レールガンは充電する音ではれる可能性があるから使えないから、30mm砲一発と近接攻撃で仕留めるとしよう。うちの製品は高い機動性が売りだ、多分反撃をもらう前に潰せるだろう。

そう思い、右腕に格納してある超音波振動ブレードを引き出してスイッチを入れる。超音波なら可聴音域の外なので気付かれることもない。まずは30mm砲を載せてある機体の左半身を壁から出して、発射。少し遅れて敵に突進。初弾は敵の一体の胴体に直撃し、活動停止。再装填までは二秒かかるので、近接戦闘を挑むことにした。

味方がやられたことにすぐに反応し、こちらに対AS用機銃の銃口を向けてくる。相手との距離は五メートル。瞬間的にスラスターを使い、移動速度と方向をわずかに変えることで銃撃を避けようとするが、左腕に被弾。痛みを感じるよりも早く相手との距離を詰めて右腕を突き出して、ASの装甲ごと中身を串刺しにする。

「ぐっ、被弾した……」

自動で被弾箇所の心臓に近い方が圧迫され、同時に痛みを軽減するための鎮痛剤が静脈に注入されるが、打った瞬間に効果が出るわけではない。正直、死ぬほど痛い。

「大丈夫か？」

「うゝゝゝ……ゝゝゝ……鎮痛剤、がなかったら……発狂ものだ」

深呼吸でなんとか頭を落ち着かせて、激痛の中悲鳴を上げそうになるのを必死でこらえながら搾り出した声で返事をする。心臓の鼓動がうるさい。

「まあ、死ぬよりはいいだろう。それよりも、流れ弾で死者一人、重傷者四人追加だ。こりゃあとでひどく怒られるぞ」

「当初、の……っ、作戦で、は…可能、で、あれば……救出しろ、とのこ、とだった。始末書程度で、済むだろう」

「あと、お迎えには救急ヘリが必要だな。気絶すんなよ、死ぬからな」

む、り………

工場奪還 その後

「工場を占拠していたテロリストの殲滅は完了。突入する際に、工場の入口ではなく壁を破壊して侵入。奇襲に成功し、混乱するテロリストを一人ずつ殺害。敵の反撃により、一機大破。パイロットは死亡。人質は重軽傷五人。死亡者は三人。テロリスト達は一人は残してあとは全員抹殺。本来の目的は達成。現在は自白剤を打って、雇い主及び背後の人物を吐かせている。」

こちらの被害は、戦闘ヘリが二機が大破。ASが八機大破。内五機はヘリに載せられていたもの。それと、一機左腕部全壊の中破」

淡々と、書類を読み上げる声が社長室に響く。部屋には社長とクロードが二人きり。よく見る光景だが、どこか少しおかしい。まるで、本来あるべきものがない、そんな光景だった。

「以上が大まかな報告となります。詳細は書類を御覧ください」

「失敗していないだけいいが、最悪に近い結果だな。何か弁解はあるか」

鋭い目付きが、男を射ぬく。しかし、彼は眉ひとつ動かさず返事をする。

「敵に不明な機体が居ました。それにヘリを二機落とされたため、予定していた作戦が行えませんでした。後から資料を漁らせましたが、我社の今度公開する新型ということでした。事前に教えられた情報では、『未確認』の機体は存在しませんでした」

冷静な抑揚のない声から、少し感情の交じる声に変わる。表情も心なしか痛みで歪んでいるようにも見える。痛くないはずがない。

なぜなら、彼の左腕は存在しないのだから。

報告内容に左腕全壊が一機とあったが、その一機が彼の操縦していたA.S。戦闘の最中に狙撃を受け、回避しそなって左腕を飛ばされた。まったくもってらしくない不注意だ。

「お前たちに非はない、と言いたいのか？」

「肯定です。情報は現場においてこの上なく重大な要因です。ほんのわずかな欠落と、コンマ一秒の遅れで兵は死にます。今回初動の遅れはオペレーターが敵機を見つけられなかったこと、事前情報の欠落が原因なので、こちらに非はほとんど無いはずです」

情報が不足しては、本来発揮できるだけの力が半分も出せないことがある。今回は正にそれだ。事前情報に無かった敵の出現に驚き、その隙を突かれてヘリが撃墜された。そしてその責任はいつたどこにあるのか。情報を入手していなかった本部か、レーダーに写る敵影を見過ごしたオペレーターか、それとも撃墜された兵士か。間違いなくオペレーターだろう。

「・・・なるほどな。わかった。オペレーターはクビ。お前たちには有給休暇。それでいいか？」

「不足です。医療費、弾代、機体の修理費用と違約金を要求します」

失った腕は最先端の再生医療で完全に、とはいかないが元に戻せる。機体も修理に出せばすぐに直せる。しかし、どれもこれも莫大な金がかかる。彼の一ヶ月分の給料など、あっという間に飛んでしまうほどの額だ。

「少し欲張りすぎないか？ 契約には違反していないはずだぞ」

「ではせめて休日出勤手当を三倍に増やしてください。契約破棄してロシアに転勤しますよ」

彼と彼女が結んでいる契約。それは別にややこしいものではなく、内容はいたって単純。ひらすら企業に尽くす。働きに応じて、通常報酬に加算して報酬を払う。可能なかぎり社長補佐は社長の要求に答え、同じように社長は社長補佐の要求に答える。単純なものだ。その単純な事が守られないなら、契約破棄という手段を取る。それは当然のこと。

「むう……医療費は社会保険、医療保険で出ないか？」

「再生医療は保険適用外です。最先端医療は総じてそんなものでしょう。それと、今回の怪我は業務中の物なので、労働法によって治療が終わるまでの間仕事は一切できません。社長補佐代理を立てておいてください」

「……わかった。今回は全て私が出す。だからしつかり療養して、できるだけ早く仕事に戻ってくれ。お前が居ないと色々困るんだ」

会社で彼がこなしている仕事の量は、通常の重役の比ではない。山のように積まれた書類を一枚一秒で処理していくのは、まるで精密機械のようだとも言われる。さらには問題の武力解決まで行う彼は、この会社の一つの大きな歯車。それが抜ければ、会社の運用に支障をきたすことがある。

「善処します。ですが、肩口から先を全てクローン培養しないといけないので、早くとも一ヶ月。遅くて二ヶ月ほどかかると思います。その間は義手も必要になりますが、これは私生活でしか使わないので自分で購入します」

「そうしてくれ……」

「私が会社経営の圧迫になっているのなら、クビにしてくれても結構ですよ。その気になれば独立傭兵にもなれますし、この会社でな

ければやっていけないわけではありません」

「お前は自分が何役こなしているかわかっているのか？」

「補佐、翻訳、傭兵、各種兵器の操縦者の四役程度でしょうか。ジェット機、ヘリ、船舶のライセンスは紙同然ですが」

補佐だけでも、普通の人間なら過労で倒れてもおかしくないような仕事の量がある。それらを「少し辛い」で済ませてしまうのが、彼が有能な証拠。

「一つ足りんな。企業の広告塔もプラスして五役だ」

「広告塔になったつもりはありませんが。いつの間に？」

「悪いが、勝手に写真などを使わせてもらった。お前はそこの有象無象よりも顔がいいからな」

顔を作るならCGでもいいのではないか。彼はそう思うが、専門家に見せて合成だというのがばれたらちょっとした騒ぎになる。

「はあ………それにしても、そろそろ誰かに仕事を押し付けたくなるな」

椅子にもたれかかって休む社長。おそらく数日は休まずに仕事をしていたのだろう。化粧で隠してはいるものの、眼の下にはうつすらと隈が見て取れる。今回の事件の遺族に対する謝罪と口封じ。他社への報告。すぐに上がるだけで面倒な仕事がつつもある。それに加えてさらに通常業務があるので、忙しいことこの上ないだろう。できれば肩代わりしてやりたい。クロードはそう考えたが、片腕では邪魔なだけだと切って捨てる。その仕事は社長補佐代理に任せるべきだ。

「重役たちに権利を一時的に分割譲渡し、休暇をとることを推奨し

ます」

「重役が権利を持って暴走したらどうする」

「互いに仲が悪いので、結託して何かを起こすという可能性はかなり低いでしょう。しかし、念には念を入れ、暴走しないように脅迫します」

「それで止まるか？」

「もしもある条件を満たした場合、家族ごと殺す。そう言うだけで怯えて何もできないでしょう」

「……いいだろう。その案を採用する。下がっていいぞ」
「失礼します」

クロードは礼をして、社長に背を向けて部屋を出ていく。歩調こそしつかりしているが、そこからは考えられないほど、顔は苦痛で歪んでいた。社長の前で醜態は晒せないと、医師から渡されたモルヒネを摂取せずにいた。それなのに、報告の最中はほとんど表情にも態度にも出していなかったのだから、その精神力はすさまじいのだとわかる。

一方社長は社長で、それに気付いていなかったわけではない。数年間は社長と補佐として付き合ってきたのだから、いくら睡魔と戦っているのが気付かないはずがない。無理はするなと言いたい気持ちを抑え、あえて気遣うそぶりを見せず、普通の応答をしていた。

今回は、社長のほうが一枚上手だったようだ。

社畜の帰宅

家計のほぼ全てを一人で賄っている俺が仕事ができなくなるとうことは、即ち家計の収入の消滅。停滞を意味する。一応保険に入っていたから保険料は出たが、それも医療費に飛んだ。

仕事が無いなら会社の寮にいても必要もなく、実家に戻ってきた。

「仕事一ヶ月休みってどういう事です？ クビにでもされたんですか？」

「少し仕事で怪我をした。完治するまでは仕事ができない」

わざわざ利き腕ではない右腕で、妹の淹れた紅茶を楽しむ。左腕は、先の工場奪還戦でわけあって使えない。一応方はなしているが。

「怪我ってなんですか」

「左腕全損。今は培養中」

香りを楽しんでいた紅茶を置いて、左腕の付け根あたりをを右手で触る。小さなツマミを二つ回し、少し強く握る。すると、軽い音を立てて左腕が外れた。

「なっ……」

「で、これは義手」

取り外した腕の、指を掴んで前後に揺らし、妹の目にしっかりと見せる。まるでよくできた玩具を自慢するように。

「よく出来てるだろ？ 結構高い金をかけてるだけある」

「玩具……じゃないですね」

「ご覧のとおりだ」

袖を捲って肩口を見せる。なんでも左腕は20mm弾が直撃した衝撃で筋繊維は肩までズタズタにちぎれて、骨も衝撃を吸収しきれず全体的に粉碎骨折。結局左腕は肩から切除され、神経接続用の機械が取り付けられることになった。

むごたらしい傷跡は見られない。しかし、それだけでも取り外した腕が玩具ではないことを理解させるには十分。彼女は細かく震えながらこういった。

「兄さんは以前、立場に応じた報酬を貰ってる、と言いましたよね」
顔を伏せ、怒りに肩を震わせながら、聞こえるか聞こえないかの中間程度の大きさの声で呟く。

「ああ。言ったな」

それに対し、詫びるつもりはない。以前は少し考えればわかるように発言したのだから、理解しきれていなかったエツタに責められる道理はない。

「何が立場ですか！ 立場ではなくリスクでしょう！！ 今すぐそんな仕事はやめてください！！」

「立場と、リスクだな。リスクも無しに家族とメイドを養えるだけの金を稼げるとでも思ってたのか？」

「う……それは否定できませんが」

「俺が働かなければ、一体誰が金を稼ぐ」

「しかし、私たちのために大怪我をするなんて……！ そんなお金は「要りません。とでも言うつもりか？」わかってるならどうして！」

妹の激しい問に対し、柳に風と言わんばかりに、見事に受け流す。妹の言うことはまるで気に止めず、こんな事なら義手見せなければ良かったと思いつつ、左腕の再装着をする。

「そうだな。二つ、理由がある。黙って聞いてくれるか？」

「……私が、納得出来る理由でしたら」

「いい子だ。まず一つの理由は、お前が大事だから。たった一人の、可愛い妹だ。親が守らないなら、兄が守らないと誰が守る？」

自分で言っておいてなんだが、こうクサイセリフを吐くのはなかなか恥ずかしいな。ナンパする分には平気なんだが。

「馬鹿な事を言わないでください！」

「何もそれほどふざけたことじゃない。子供を守るのは大人の仕事だ」

「兄さんも十分子供です！」

「まあその話は後で聞こう。二つ目の理由。お前は親父の顔を覚えてるか？」

おふざけはやめて、シリアスに。軽い笑みを浮かべた顔から一転、真剣な表情に切り替える。

「……いえ、覚えてませんが」

「まあ、それもそうだな。覚えてたら逆に怖い」

父親が失踪したのは、俺が五歳の頃。記憶の中でもおぼろげにしか残っていないというのに、妹のエツタが覚えているわけがない。

「その事なんだが、今の仕事は世界中の偉いさんとコネが持てる。

それといろんな情報が集まってくる。そういうのをちょっと利用して、親父の情報を集めてる……まだ見つからないんだがな」

そこで、一つ大きな溜息をつく。

「もう何年か経つが、それでも集まらない。よほど上手く隠れてるんだろうな。死んだなら死んだで情報が入るはずだから、生きているのは間違いないだろうが」

「なぜそうやって探すんですか？ 私たちは、捨てられたのに」

「だからこそ、会って、話がしたい。なぜ俺たちだけ置いてどこかへ去ったのか。なぜ顔すらも見せないのか。今までどこに身を隠していたのか」

死んでいても、生きていても、どちらにせよ会いに行くことには変りない。会って話をして、納得しなければ殴り飛ばす。と、口には出していないが、頭の中では決定していた。元軍人、今でも社長補佐という半分傭兵のような仕事をしている。

社長補佐の仕事の中で、問題の武力解決というのがある。それはまさに傭兵の仕事だろう。そんな仕事をしている人間に殴られれば、顔がひどい状態になるのはまず間違いないが、後で医療機関に放りこめば万事解決。

「顔に会ったら殴るって書いてますよ」

「殴って話しあって連れ帰る」

捨てられた事に対する怒り。他でもない父親のせいで、青春と呼ばれるものを味わうこともできず、理解することもなく、妹の学費を稼ぐただけに死と背中合わせの仕事をするハメになった。母親の浪費癖もあったせいでもあるが、腹が立つのは間違いない。

「無茶苦茶です」

「それを押し通す仕事だ」

「クス……でも、兄さん。本当に今の仕事をやめるつもりは？」

「ない。今の仕事は危険で面倒も多いが、それ以上に気に入ってる給料もいい。社長への恩もある」

スリルがあるしな。とは言わなかった。心配をかけたくないがため、あえて本音を隠す。

「ならせめて、どこの会社に所属してるか位は」

「俺の口からは言えない。いや、言わないが正しいな」

「やっぱりですか……ですが、前のへりに書かれていた社章。あれは、少し調べましたがポリス社の物ですよ」

「正解とも間違いとも言わない」

「それで、ポリス社のことも少しだけ調べました」

「……それで？」

「会社のトップページ。社長補佐の欄に、クロード・メイユールという名前がありました。兄さんの名前があり、写真も写っていました。これは偶然でしょうか？」

「……」

偶然なはずがない。わかっていて言っているのだろう。エッタの性格からして、不確かではないことを聞くことはない。何かを尋ねるときは、確信を持っている時だけ。

自分の立場はアッサリと知られてしまったようだ。

「同姓同名の別人ということはありませんよね？」

「まさか。写真も確認したんだろう？」

「はい。あそこは、軍事企業。でしたよね？」

「そうだ」

怒りの籠った質問。それを肯定する。ギリ……と歯ぎしりの音が小さく鳴る。

「人殺しの道具を作っている会社ですよね？」
「そうだ」

感情が揺れるのに反応し、大きく目が見開かれる。次に吐き出される言葉は、罵倒の類だろうと容易に推測できる。

「どうしてそんな企業に肩入れするんですか！」
「給料が良い。ストリートチルドレンを社員に教育する計画を立案した社長への恩。待遇もまあ、悪いということはない。それなりのリスクは伴うが、な。……っ」

顔を殴られるが、大して痛くない。むしろ殴った本人が痛そうだ。

「馬鹿ですかっ！」

「何がだ」

「兄さんは馬鹿です！ バカ過ぎます！」

「だから何がだよ」

「人の命を奪って手に入れた金なんて必要ありません！」

「……言うと思った」

人殺しについて忌避感を抱くのは、別におかしくはない。むしろそれが正常だ。

「この際白状しよう。社長補佐の仕事を知ってるか？」
「……？」

「交渉で解決が望めない問題の武力解決」

素直に白状する。彼女は動揺しているようだが、わざわざ気にする事でもない。知られたのなら隠すまでもないと判断したのだろう。

「所詮、殺人だ」

「どうして……」

「始まりは十年前、だったと思う。教育を受けて、最低限の火器を与えられて、いきなり最前線に放り出された。死にたくないから殺して、生還したらまた最前線へ。それを延々と繰り返してる内に、社長に目をつけられて気づけば今の地位だ」

「私の兄さんは、人殺しをするような人間じゃありません！」

「認めたくないならそれでいい。そう思いたいならそう思っていればいい。無理に認めろとは言わん」

俺は少し固い人間だが、融通が通じないわけではない。状況に応じ、色々と変えられる男だ。

一方で妹は、少々性格がキツイ。一度固定された認識を改めることが、ほぼ無い。箱入り娘だけに、少々頭が硬いのだ。

「……これ以上あなたと一緒に居るのは、我慢できません。出ていきます」

そう言って彼女は立ち上がり、部屋の扉を開けて出て行く。

言葉のニュアンスからして、おそらく家出する気なのだろう。

「待て」

部屋のドアノブに手をかけているエツタに声をかけて、止めさせる。振り返ったその表情はなかなか、殺意とはまた別に応えるものがある。

「何ですか!」

「とりあえず落ち着いて、話を聞け。受けた恩は返すものだろ。聡明なお前ならわかるはずだ。恨みもそうだが」

「……それは兄さんの考えでしょう。恩を上回る怒りがあれば、恩を返さなくてもいいと考えています」

「なら、お前の怒りは約四十万ユーロの金額を打ち消すほどのものか」

四十万ユーロ、生活費寮費入学金授業料その他諸々の雑費を計算して合わせたもの。

「それはすまん」

「……」

「だが、それだけの投資をさせてもらったんだ。逃避は許さん。どうしても、というのなら……」

「どうしてもというのなら?」

「そうだな。治験でもやって返してくれ。いいところを紹介するぞ。少々危険だが、短時間で稼ぐならこれほど適したものはない」

懐から数枚のチラシを取り出す。どれも有名な国立病院の治験募集の紙だ。

「……いやよ」

「なら大人しく援助を受けて、立派な大学に行くといい。金はどこかの一流企業に就職して、分割払いで払ってくれればいいさ。利子はとらん」

「……また上手く丸め込まれました」

「社会人ナメんな。じゃ、話はこれで終わりだ。今日は寝る」

席を立って、エッタを押しつけて扉を開く。話すのは苦手だ。

社畜の友人(?) (前書き)

今回は主人公の友人(?) とのお話です。部下や上司、家族と接している場面があっても、友人という対等な相手との会話は一切ないので。

社畜の友人(?)

仕事柄、部下は多くとも友人と呼べる相手が非常に少ない俺である。しかし、全く居ないというわけではない。まだ親父がどこかへ行く前、それなりに裕福な家庭のお坊ちゃんとして過ごしていたときに、塾に通っていたのだが、その時には友達結構居た、のだらう。顔は数名を除き全く思い出せないが。その数名が、今現在の俺の友人。

さて、そこで少し話をしよう。あまり思い出したくはないが、昔の話だ。

小学校に登って三年間はまともに遊んでいたのだが、丁度三年目のクリスマス、唯一親父が帰って来なかった日。親父の帰りを待って雪の降る中を、一夜を外で過ごした。カゼをひいてはいけないから中に入ってください、というメイドの話も聞かず、日が昇るまで外で待っていた。

そして、親父は新年を迎えるまで帰ってこなかった。そこでようやく、家族は親父が失踪したということに気がついた。そこから母さんの浪費癖に拍車がかかり、少しでも家のために金を稼ごうと色々と手を尽くした。飲食店で皿洗いをしたり、見知らぬオッサンから一晩で五百ユーロになるという話を聞いて、そのまま着いて行ったら服を脱がされて着せ替え人形にされた。かなり稼ぎが良かったから一月程続けたが、一ヶ月経つと少女が着るような服を着せられて、そのまま押し倒されて……三千ユーロほど持たされて家に帰った。一ヶ月くらいそれを繰り返して、そのオッサンはどこかへ行つて。ともかくそのおかげで余裕ができたので学校にも行かずフラフラしていると、先代社長の打ち出したプロジェクトに適合する子供

を探しに来たポリス社の社員にストリートチルドレンか孤児かに間違えられて拉致され。最低限の教養を受けて、訓練されて、流されるままに戦場へ。それで生還したらまた戦場。負傷したらさすがに病院には入れられたが、退院したらまた戦場へ。

「やっぱお前おかしいぞ。どうして小さい頃に掘られてそんなにヘラヘラ笑ってられるんだ？ 男性恐怖症にならないか？」

さっき注文した熱いコーヒーをすすりながら飲み、口の中を冷ますために言葉を発する俺が小さい頃から付き合いのある相手と話す。猫舌なのにコーヒー好きとは、苦勞するだろうな。コーヒーは淹れて二分以内が一番美味い、アイスコーヒーは邪道、なんて叫ぶようなやつだし、淹れたてのコーヒーを飲むのは結構な苦痛だろうに。

「いや、慣れれば結構イイぞ。おかげで今は両方イケるしな。たぶん、あまり乱暴にされなかったのがいいんだろう」

「小学校時代のお前はそんなじゃなかったのになあ……そうか。きっと掘られて戦場へ行ったせいでおかしくなったんだな？ そうなんだろう？」

ああ、なるほど。その苦痛がやみつきになってるのか。それなら納得だ。苦痛も楽しみの内、ということなら、コーヒーの味と、熱いのを我慢して飲むという二つの楽しみを同時に味わうことが出来る。苦勞などではないのか。

自己完結した所で、相手の質問に答える。

「環境が変わり、時間が経てば、昔と考え方が変わるのは当然だと思っただが」

「まあ、そうなんだが……あんまりに変化のベクトルが極端すぎだな」

「誰でも意外な性癖の一つや二つ程度はある」

昔の事を話せと言うから話したというのに、変態扱いとはまたひどい。ほんの少しだけ傷ついた。ナノサイズの傷だが、傷ついた。仕方ないので、ちよつとした仕返しをしようか。

「お前だって、実はMなんだろう？」

「は？」

驚愕の表情のままで顔が固まり、瞬きはせず、そのまま手だけが動いてコーヒーを口に運んでいる。そして、コーヒーを一口飲んだ後……

「ツグハ、げほっゲホオッ！！いきなりっ、何を言って!？」

まさかこの反応。いくら確信を持って言ったとはいえ、まさかここまで驚くとは。ほんの少しからかうつもりだったのに。

「ゲホ、ゲホッ、ゲハッ、気管に、コーヒーがあっ」

「大丈夫か？」

「ふう……ああ、大丈夫だ。それにしても、なんでいきなり」

「ん？ お前がマゾヒストだと結論づけるに至った過程を教えてください」と

「マゾヒストだったのは断固として否定する！ が、まあどうしてそういう結論に至ったかは、気になるには気になる」

素直じゃないな。まあ、うちの妹のように素直すぎるのも困るが。

「猫舌なのに熱々の淹れたてコーヒーを飲んでいること」

「……それがどうしてマゾヒストになる」

「猫舌なら、下手すれば火傷するほどのコーヒーを少しずつとはいえ口に含むのは結構な苦痛のはずだろ。にも関わらず、ここでかなり熱めのコーヒーを三杯も飲んでる。熱すぎれば味や香りを楽しむ余裕もないはずなのにな。そういった理由で、その苦痛を楽しんでいるという結論に至った。苦痛を楽しむような人種はマゾくらいしか居ないだろう」

からかうのを続けながら、アイスコーヒーを少し口に含む。冷めても風味が少し弱くなるくらいしか差はないように感じるんだが、愛好家からすればそれ以外の所が微妙に違うのだろう。

顔を真っ赤にして、頭の後ろでまとめた髪を振り回している友人には、果たしてその違いがわかるのか。きっとわかるから飲んでいるんだろう。

「冗談だからあまり本気にするな。それと、カップが倒れたら火傷するぞ」

「アッツヅウ！！」

カップが混乱している友人の手に触れて倒れる。当然、中に入った熱々のコーヒーはこぼれて、その被害の及ぶ先は、さっきまで飲んでいた友人だ。

「やれやれ、言わんこっちゃ無い」

席を立て、床をころがる友人の隣に腰を下ろす。

「手をどけろ。患部を抑えるな」

右手でコーヒーをかぶった足を抑えている手をどけて、左手でテーブルの上に置いてある氷水の入ったボトルを持つ。熱湯をかぶっ

て起きた火傷の場合に抑えるのは、あまりいいことじゃない。熱湯をかぶった衣服をそのままにしておくのもまた同じ。服の上からでもさっさと冷やすことが最優先。

「ちょっと冷たいが我慢してくれ。ウェイトレスさん、氷水持ってきてください」

氷水の入ったボトルの蓋を外し、冷水を患部全体にぶちまける。ズボンに熱湯が染みこんで、より深い火傷を負うのを防ぐため。空になったボトルを横に置き、この短時間で癒着を起こすことは無いと考え、ナイフを取り出す。ズボンの右足部分を縦に思いきり切り開いて、患部を確かめる。少し赤くなっている程度なので、騒ぐほどのものでもないだろう。

「お客様、大丈夫ですか!」

確認作業が終わった直後に、ウェイトレスが大慌てで結構な量の水を持ってやってきた。これだけあれば、応急処置としては問題ないだろう。というか、病院につれて行く程でもない。保湿ゲル塗って、その上から清潔なガーゼを当ててズレないようにしておけば三日で治る。

「すみません、ツレが迷惑をおかけしまして」

「かまいません! それよりも救急車をお呼びしましょうか!」

「大丈夫です。この程度なら、家庭用医療用品で軽く治せますからお騒がせしました。ほら、立て」

手を引っ張って無理やり立たせる。さっき言った通り大したことはないので、問題なく歩けるはず。

「うぐう」

立たないので、仕方なく腕を持ったまま引きずってレジまで行き、請求書に書いてある額にケタを一つ追加した分の料金を払う。

「お釣りは迷惑料だからもらってくれ」

「ちよっ、痛い痛い！ 引っ張るなって腕もげるゝ！！」

「ありがとうございましたゝ」

店員の声を背中に受けながら、友人の悲鳴は無視して外に出る。道路を走るタクシーを止めて、友人を荷物のように中へ放り込む。

「この紙に書いてある住所まで」

運転手にこいつの住所の書いてある紙を渡す。そう遠くはない、車で十分くらいだ。

「もうちよつと丁寧に扱ってくれよゝ、友人だろ？」

「あのまま店に居ても、店員さんに悪いだろうからさっさと出たかったんだ」

そもそもこいつが自分の足で歩けば、俺だって肩を貸す程度はしてやるのに。引きずってくれと言わんばかりにずっと倒れてこっちを見上げてるもんだから、ついつい嗜虐心が刺激されてしまった。

「このサディストめ」

「やかましい。後ろの穴を開発されたいか」

「……」

あれ、想像したのか顔を真赤にして黙りこんでしまった。これは

少し悪いことをしたな、後で謝っておこう。

「案外いいかも」

「……」

だめだこいつ。どうにかした方がいいな、頭の病院にでも連れていこうか。……その場合だと、俺も入院しないといけなくなるか。一種の異常者といってもおかしくないような脳みそしてるしな。

社畜の恋人

世の中には、知られざる真実というものが数多く存在している。その真実には、某社の社長補佐が両刀だったというある意味ではどうでもよく、ある意味では知られれば世間を大いに賑わすような秘密。某六大企業がそれぞれの国の国会、マスコミに多額の賄賂を流して世界を牛耳っているという途方も無く大きな、ある界限ではもはや常識となっている秘密。そして、その六大企業の兵器生産工場がグリニッジ標準時間で同時占拠され、迅速に処分したという、世間に知られれば非常にマズイ秘密。

「……あとは、社長補佐に一般人の恋人が居るってことくらいか。進展はないが」

タクシーから降りて、どこからどう見ても普通の一般家屋の玄関に入りながらつぶやく。今思えば、激動の世界にいながらも、ここまで注目されていないのは不思議だ。世界的企業の社長補佐となれば、パパラッチ集団の一つや二つついてきてもおかしくないような気がせんでもない。だというのに、今までにそういうのを一人として見たことがないのは、下手な写真を撮って内々に処理されることが恐ろしいのだろうか。

まあ、写真を撮られても別に構わないんだが。

「世界経済には詳しいくせに、なんで女のこととはサッパリなんだよ。おかしいだろ、経済よりよっぽど単純だろ。褒めて愚痴聞いて抱いてプレゼントすれば喜ぶんだぜ？」

「極端過ぎるだろ」

確かに一時の満足としてはそれでいいのかもしれないが、俺の求

めるのは継続的な満足感。他人が近くに居ることが不快でないということさえ感じられれば満足なんだが、そういう肉体関係のみを求めるような付き合にはなりたくない。

「女なんてそんなもんだって。俺がそうだし。ほら、家だぞ、抱いてもいいんだぞ」

「他の女なら遠慮なく抱くんだが。なぜかお前とそういう関係になろうとは思わん」

ナンパした女を抱いたことなら何度でもある。しかし、なぜだかこいつに誘われても勃たない。裸で「さあ抱け！」と言われ興奮はしたが、勃つことがない。少なくともEDではない。他の女となら普通に勃つ。もう一度言う。なぜかはわからないが、コイツにだけは勃たない。

「……付き合ってもう何年だ？」

「五年かそこらだろう」

他愛もない話をしながら、相変わらずカギのかかかっていない玄関の扉を開く。いくら盗まれるものがないからといって、女一人の家にカギをかけないのは無用心が過ぎるような気がするが。

「その内に何回セックスした？」

「ちょっと待てよ……」

顎に手を添えて考える仕草を相手に見せて、いかにも考えているというように見せる。答えはわかっているが、言ったら怒るだろう。

「わからん」

「ゼロだよ！　どうしてジョークならあんな事言えるのに実際に手

出ししないんだよ！ 俺そんなに魅力ないか！？」

「出る場所は出ていて、引っ込むところは引っ込んでいる。顔も俺の好み。魅力は大いにあるぞ。ただ……」

少し言葉に詰まる。なんと表現すればいいのやら。本当に好きな相手には性欲を抱けない？ そういった感じがする。なんというか、恋人というよりは肉親に向ける親愛の情に近いような。

とりあえず勝手にリビングまで上がってインスタントコーヒーを入れて、家主の許可を得ずにソファに座る。

「ただ？」

「性欲を向ける相手としては見れないんだろうな。ま、セックスするだけが恋愛じゃないだろうし、別にいいだろう」

そういった行為も恋愛に含まれているのだろうが、できないならできないで、それなりの愛し方というものがあるだろう。それを学んでいる最中だが、なかなかわからないものだ。特に何かを欲しかったりはしない。現金を渡しても突き返される。

そもそも恋人と友人の違いはなんだ。どちらも元はといえば他人だろう。体を重ねるか否か？ それだとセックスもたまにする友人も、大した付き合いでもない、街でナンパしてやった女も恋人か？ それは違う。そういうわけで友人と恋人との違いはセックスではないと思う。

「どうしてそうと見れない。言葉遣いは荒いが俺も一応女だぞ？ 五年も付き合っておいて一度も抱かれなくなるとプライドが傷つく」

破れたズボンを脱いで、警戒の色一つ見せずに下着姿になる。もう少し恥じらいを持ったらどうかと思うんだが、言っても無駄だろう

うし何も言わない。

「安心しろ。女としての魅力は十分に感じている」

「目の前で着替えしてるのにその反応だぞ？ 信じれるか」

目の前で女が着替えをしている程度で一々反応するのは、童貞くらいだろう。その判断基準はあてにならない。

「あとな、なんでこのズボン切ったんだ。気に入ってたんだぞ」

「理由は患部の確認のためと、被害の低減のため。脱がせばよかったか？ 店員の見てる前で」

「……女子に対してその言い方はないぞ」

「今更だ。それにしても、やっぱりコーヒー好きなだけあってインスタントコーヒーも美味しいのを選んでる」

コーヒーを一杯飲み終わったところで感想を言う。これでさっきの件は帳消しにしてもらえるのが、いつものパターンだ。

「おお、さすがに気付くか？ 日本からわざわざ輸入したんだ。ネ○カフェ。やっぱり日本製品はハズレが無い上にどれも最高の品質だから、どこのにしようか迷ったんだが、試供品を買って飲んだらスゲー美味くてさ。今までのじゃ満足できなくなったんだよ。おかわりはいるか？」

わかりやすい女だ。趣味のことでほめられるとすぐに気分を良くする。裏も表も無いのがいいところなのだが、同時にそこが悪い所でもある。騙されやすいのだろう。

しかし、これがまた心地よい。

「いや、いい」

「なんだ、つまらん」

「それよりも、ズボンの事だが。明日にでもそれと同じものが届くだろう。タクシーの中で注文しておいた」

「マジで？ 金ないんじゃないっけ」

「いくら余裕が無くても、ソレくらい金なら問題ない」

母さんの浪費癖は矯正中だから、その分の金が浮いてくる予定。そのおかげで、これからは前よりも健康的な食生活が送れるはず。

給料が整備費修理費弾薬費で消し飛んで、さらに母の浪費癖に回す金で食費すらも消えて。一ヶ月社長の世話になった屈辱の日々は忘れようがない。しかし、これからはそんなことは起きなくなるだろう。起きなくなるはず。起きなくなればいいんだが……。

「マジか……何ヶ月も生活費を削って手に入れたズボンなのに」

「ふっ、俺の給料をそこの一般市民と一緒に思うな」

「自慢かコノヤロウ。羨ましいぞコノヤロウ。俺の安月給重労働の仕事と代われよコノヤロウ」

安月給で重労働か。一度でいいからそういう普通の仕事がやってみたい。社長についていくのは疲れる。腕が吹っ飛ぶとか、そういう危険の無い安全な仕事がやってみたい。

今の仕事はやめないが。

「それは無理だ。そこらの仕事とは比べものにならないほど給料はいいが、同じように仕事の量もすごい。おまけに戦場に行って兵器の実地テストもさせられるから、命の危機にさらされることも結構な頻度である。そんな仕事をわざわざ恋人にさせると思うか？」

「そんな仕事すんなよ。恋人が居るんだから」

「その通りだと思うぞ。だが、今更抜けるには色々コネを持ちすぎたんだよな。あと外に漏れたらマズイ情報もかなり知ってるか

ら…やめたらどうなるやら」

会社をやめたら間違いなく黒いスーツを来た方々に機密を漏らさないよう、毎日追われることになるだろう。何も話さなければいいだけだが、私生活を二十四時間監視されるのは息が詰まる。今は会社に所属しているから、会社が潰れたら俺にまで莫大な借金ができる。だから会社に不利益な情報を流すことはないだろうと判断されて、監視を免れているわけだが。

「安全を求めるならグループ内の会社に転勤すればいいんだろうが、そうすると社長にエッタの学費を肩代わりしてもらえなくなる。全くメンドクサイ」

「エッタ？ ああ、そういえば、妹居るんだったな。なかなか美味し……可愛かった記憶がある」

そういえば、こいつも同性愛の気があったか？ 記憶にないから、こいつの新しい趣味か。エッタは「同性愛者は根絶やしにすべきです」と言って毛嫌いしてるから、近づけないようにしないとな。

「言いなおさなくてもいい。ただエッタの前でそれを言ったら護身用拳銃の弾丸が飛んでくるから気をつけろ」

「食うな、とは言わないんだな」

「食う前に撃たれて終わるだろうからな」

話していると喉が渴くので、コーヒーの二杯目を淹れる。淹れてすぐに飲んだので、当然熱くて口の中を火傷するが、十秒しない間に痛みも消える。

「いくら猫舌じゃないからって、大丈夫か？」

「重役特典のナノマシンのおかげで平気だ」

「へー、便利だな」

まあ、普通はそう思うだろうな。しかし、どんなことにも欠点はつきもの。うまい話にはほぼ確実に裏があるという事は、古今東西変わらないだろう。

「現在地が常に本社に送られる。ついこの前知らされた」

「二十四時間監視されてるわけか」

「そういうこと。まあ、私生活に干渉するわけでもないし、気にしなかったら無いのと同じだ」

聞かされてからは驚いたが、案外すぐに慣れて気にならなくなつた。人間はどのような環境であれ、必ず適応できる生き物だということ、身を持って体感した。

「そーなのかー」

少し間延びした感じで言う。

「そーなのだー」

それに同じように返す。

「……プッ」

「フッ」

少しだけ笑いあう。こうした平和な時間を過ごせるのは、まさに怪我の功名というやつか。仕事ができないので腕が鈍らないか心配だが、シミュレーターに入ってから二、三回現場に出れば勘も戻るだろう。あまり心配する必要はない。

「それじゃ、また明日。アリス」
「おう、また明日な、クロード」

席を立ち、リビングを振り返ることなく玄関から出て、夕方の少し冷え始めた空気を吸いながらタクシーを呼び止めて家へと帰る。

毎日こんな平和な生活を送ることが出来れば、どれだけ幸せか……考えるだけ無駄か。どうやっても死ぬまで辞めれない仕事だし。

社畜の恋人（後書き）

もう二、三話ほど、こんな話が続きます

社畜の告白

誕生日、と聞くとまず連想するのは何だろうか。圧倒的大多数の人間がまず思いつくのは家族からの祝福。そして圧倒的な幸福感。しかし、どうも俺はその大多数に当てはまらないようで、誕生日というどうしても憂鬱な気分になってしまう。理由は、親父がいなくなっただけというもの、家族からは一度も誕生日を祝われたことがないから。

「エッタ。今日は何の日だ？」

「今日は……八月一日。建国記念日ですね。それがどうかしましたか？」

そして、哀しいかな。今年も家族が誕生日を憶えてくれていないようだ。社長とアリスからは誕生日を祝うメールが来たというのに。まあ、ある意味では自業自得か。今まで家に居ない時間があまりに長すぎたから、そういうのは仕方ないことなのかもしれない。

一昨年と同じように、諦めてアリスに慰めてもらおう。去年の今日は出張だったから、飛行機の中で誕生日を迎えて、出張先で社長の護衛をしながら誕生日を終えたから、祝ってくれたのは社長だけ。寂しい誕生日だった。

「どうしたんですか、そんな暗い顔して」

「いや……妹が兄の誕生日を覚えていないことに少し傷ついた」

心の中は嵐で大荒れ。傷ついた度合いはA Sの対人機銃にミンチにされたくらい。何、大したことはない。一時間もデートだ。そんなことは忙しくて忘れるだろう。

「そういえばそうでしたね。いつも家に居ないので、つい忘れていました。誕生日おめでとうございます」

「遠まわしにもっと家に居てくれて頼んでるのか？」

「気持ち悪いことを言わないでください。言っておきますが、プレゼントはありませんから」

せめて誕生日くらいは冗談を言わせてくれてもいいんじゃないだろうか。あとプレゼントはいらないから、もう少しだけ優しくして欲しい。そう願うのは贅沢だろうか。いや、年に一度の記念日くらい、このくらいの贅沢は許して欲しい。

それとも、この前の事をまだ気にしているのだろうか。

「……けど、今日の夕食は私が作ります。早めに帰ってきてください」

「は？ ああ」

驚いた。てっきり嫌われているのかと思ったが、そうでもないのか。どうやら自分なりに結論を出してくれたみたいだな。結論が出ずに迷っていたら話をして無視されていただろうから。

しかし、料理といえばメイドが毎日作っているだろうから、エツタはあまり料理を作ったりはしていないはず。うまく行くかどうか少し心配だ。もちろん、楽しみでないはずがない。エツタが俺に料理を作ってくれるなんて、今まで一度もなかったことだし、珍しいという意味ではアリスとデートするよりも楽しみだ。

「張り切るのいいが、ケガはするなよ」

「馬鹿にしないでください」

「まあ、一応の注意だ。楽しみにしてる」

美味い不味いは別として、エツタが俺に料理を作ってくれるとい

うこと自体がうれしい。もうそれだけでパンが十枚くらい食べれそうだ。溢れ出る喜びの感情を抑えきれず、頬がゆるむ。

「おっと、そういえばケーキ焼いてあるんだった。ワンホール残しておくから、オヤツにでも食べてくれ」

緩んだ顔を見られたくないがために、少し不自然だが話を切って、ケーキをオーブンに入れたばかりのキッチンに向かう。スイスでは誕生日は祝ってもらうものではなく、自分が企画して祝うもの。祝ってもらうのはもちろん嬉しいが、祖国のやり方で祝うのもまた楽しい。ケーキを持って行って、恋人と夕方まで楽しく過ごして、帰ったら妹の手料理。今までで最高の誕生日じゃないか。ああ、ディナーの予約は取り消しておかないと。

「はい。じゃあ、行ってらっしゃい兄さん」
「ああ」

出だしこそは泣きかけたが、その日のことは最後までわからないか。楽しい一日になりそうだ。

・・・・・・・・

ベルン美術館の前でタクシーが止まる。運転手に代金とチップを渡してから、ドアを開いて歩道に降りる。長い間座っていたせいで若干固まっていた体を背伸びで伸ばして、一度深呼吸してから時間を確認する。

アリスとの待ち合わせの時間は十時。腕時計の指す時間は、十時十九分。遠くに見える時計塔の指す時間は、十時二十分。腕時計と時計塔の時間が二十分近く早く進んでいるのならば、待ち合わせの時間丁度だ。待ち合わせ場所はベルン美術館入り口のベンチなので、もしそこに居なければ電話で詫びるしかないだろう。

さて、一刻も早く彼女が居るかどうかを確認したいところだが、この場所からベンチは人ゴミのせいで見えない。やはりベルンで一番の観光地、しかも今日は休日ということで、国内国外を問わず多数の観光客が訪れている。それには現地人として誇らしく思うが、今は観光客の顔を眺めている場合ではない。人の波に揉まれながら、入り口へ向かう。

「ああ、よかった。帰ってないか」

人の波に揉まれつつ進んだ先には、不機嫌そう。いや、あきらかに不機嫌な表情のアリスとそれをナンパするイタリア人。人の女に手を出そうとはいいい度胸だ……と言いたいところだが、よくあのアリスに話しかけたものだ。そこは感心に値する。

「遅い！ レディを待たせるなんて糞にも劣るぞ！ お前の時計は糞溜めにでも落ちて故障してるのか！？」

こちらの顔を見るなり立ち上がり、イタ公を押しつけて罵声を放ちながら寄ってくる。あまりの剣幕と、顔に似合わない下品な罵声に周囲の視線がこちらを向く。そして雰囲気耐え切れなくなったイタ公は早足に人ごみの中へ消えた。

「すまん、途中でタクシーが渋滞に巻き込まれてな。やっぱり祝日なだけあってよく混む」

「言い訳は聞いてない。跪け」

……いつになく怒ってる。彼女は待たされるのは嫌いってわかってたのに、自分に非はないとはいえ待たせてしまったせいかな。渋滞のせいなら、許してくれるかと思ったんだが。甘かった。こうなるなら、いつそヘリでも使うべきだった。

「と、いうのは冗談。お互いに誕生日だし、楽しく過ごすのにちよつと待たされたくらいで怒ってたら誕生日が台無しだろ？」

「とんだサプライズだな」

まあ、俺もそれに負けないサプライズを用意してあるから、夕方にお礼として驚かせてやろう。

「で、まずはどこに行くんだ？　いつもと違う場所に連れていってくれることを期待してるが」

とんだ不意打ちだ。今日はアリスに任せるつもりだったのに、俺に選べとは。どこに行くかなんて全く考えてなかったから、本当に困った。

とりあえず考えてみよう。

「この時期なら、そうだな……プールにでも行くか。水着はあるか？」

国土の気候のおかげでプールに入りたい、と強く願うほど暑くはないが、やはり八月の初め。夏の盛りは暑いもの。なんとなくプールが頭に浮かんで、なんとなく言うてみた。義手は軍用で防水仕様だし、泳いでも問題ないはず。説明書にもそう書いてあった。

「無いに決まってるだろ馬鹿野郎」

やっぱり。いや、まあ当然か。いつもは適当に街を散歩して買い物して終わりだし、俺もとっさに思いついたことだし、当然持ってきてない。金なら現金もクレジットも用意してあるから、買えばいいか。買って泳いで、疲れて帰って。それから家族に紹介しようか。

「なら買いに行くぞ」

「は？ 何を」

呆氣に取られるアリスの手を引いて、ショッピングモールの見える方向へ向け歩き出す。さっきのやりとりを見ていた、または聞いていた人たちは、自然と道を空けてくれた。よほどさっきの罵声が恐ろしかったのだろう。活発そうだが凶暴さは全くにじみ出ていない顔とのギャップが、慣れていないといっそう恐ろしく感じるからか。

「水着」

「誰の」

「俺と、アリスの。プライベートビーチじゃないんだ。全裸じゃ泳がせてもらえないだろ」

「え、ちよつと、待てって！」

そう言われても、待つつもりはない。いつもと違う所を希望したのはアリス本人。そしてその要望通りにいつもは行かない所を提案して、そこで遊ぶための準備をする。そのくらいは金を持っている方がしないと。

「わた：俺泳げないんだけど」

「教えてやるから問題ない」

ガキの頃に訓練の一環として着衣水泳を溺死寸前までやらされたことがある。しばらくのブランクがあるが、体が覚えてくれているだろう。水に浸かれれば思い出すに違いない。

あと、今のは焦って「私」って言おうとしたのか？ 「俺」じゃなくて？

「ところで、さっき『私』って言いそうになっただろ」

「な、なんだよ……」

プイと横を向いて、顔を赤くしながら小さく呟く彼女。さっきの怒りの表情からは想像もつかない可愛らしさだと思う。多分、俺はアリスのこういうところに惹かれているんだと思う。付き合う理由が金目当てでないというのもまた大きな要因だが。

「もう少し女らしくしたほうがカワイイって話だ。今のままでも十分カワイイがな」

「うるさい！ 余計なお世話だ！」

上半身を少し反らすと、ブンと拳が目の前を通りすぎていった。照れ隠しでも暴力はいただけくない。ただけないが、恋人ならそういうところもまた可愛く思えるものだ。惚れた弱みというやつか、全く。

……そろそろ話を変えようか。マジメな話に。

「それと……」

続きの言葉は短い。口に出してしまえばすぐに済む。

「……」

声を出そうとするが、喉が渇く。舌が動かない。唾を飲み込み、喉を潤して、一度深呼吸。

「……今日の夕食は、うちで食べないか？」

思い切って、言ってみた。俺がアリスの家に行くことはあっても、アリスを家に招いたことはない。

「……何だよいきなり」

「妹が夕食を作ってくれるようだな。嫌なら適当なレストランにでも行くか？ 社長と食へに行くことがあるからいい店を知ってる」

家を出る時には感動のあまり予約をキャンセルしようかとも思ったが、一応アリスにも聞いておくべきだろう。彼女が嫌と言え、妹には悪いがレストランで夕食をとることも仕方ない。

「お前の言ういい店って、アレだろ。高級店だろ？ やめてくれ、俺はそういうところには慣れてないんだ。それなら、お前の妹の手料理の方がいい」

「ありがとう」

断られなくて少し安心した。妹との約束を破れば、後で機嫌を直させるのに苦労する。それに……いずれ家族にも紹介しないといけないのだから、顔を見せるのは早いほうがいい。

「礼を言われるような事じゃねえよ。それに、家に呼ぶってことは特別な話があるんだらう？」

「……お見通しだったか」

隠していたつもりだったが。そう匂わせるような発言はしたが、まさか嗅ぎつけて本音まで掘り返して見つけられるとは思わなかった。

「今日で五年の付き合いだ。そのくらいわからないとも思ったか」「せっかく用意してたサプライズが潰されたのは、少し残念だがな。まあ、拒否しないってことはオツケーってことなんだよな？」

何が、とは言わない。さっき俺の発言から本音を掘り出すような頭だ。詳しく言わなくてもわかってくれるに違いない。

「……正直、今日切り出されるとは思わなかったな」

小さく頷く。胸の奥から搾り出したような、辛うじて聞き取れる声。動揺しているのがよくわかる。俺も話を切り出すのには、少し緊張した。断られやしないかと思って、内心子供のように怖がっていたが、本当に良かった。

「いずれは話されると思ってたか？」

「まあな。こういう関係になって五年目だし、期待はしてた」

期待してしてくれたとは、それは、俺としても嬉しい限りだ。

「ただ、こういうのはもう少しムードを考えて言った方がいいんじゃないか？」

「お前にムードとかそういうのはあんまり合わないような気がしてな。気に触ったなら謝る」

「いや、変に気を使われるよりはマシだ」

お互い、仕事以外で細かいことを気にする性格でもない。今までもこういうことにはあまり気を張っていなかった。これから、より距離が近くなるかもしれないが、こういう関係を続けばいいと思う。

社畜の買い物

人というのは、自分も含めて不思議なものだと思う。何かに忌避感を抱いていても、一度その何かに触れるような行動をとってしまえば、次からは段々と忌避感が薄れていく。そして三回、四回と回数を重ねていくごとに、気がつけば忌避感を全く感じなくなってしまう。面白いといえば面白いが、残酷といえば残酷だろう。

例えば、身売り。小さいころ見知らぬオッサンに金のためにケツを差し出してた。最初はただ気持ち悪いとしか感じなかったが、回数を重ねるごとにだんだん楽しくなっていく。別にこれは残酷とは思わない。価値観が広がってよかったし、貴重な体験だったと思う。

ただ、相手に伝えるとほぼ確実に避けられるので、親友と付き合いの上では隠しておいたほうがいい事実だ。親友なんてほとんど居ないが。ただしアリスは例外。恋人であり親友でもあるので、全て話した上で付き合っている。俺も彼女の人に知られるとマズイようなことを知っている上で付き合っている。つまり、お互いに秘密をさらけ出すということが、恋愛を長持ちさせる秘訣。

.....

場所はデパートの水着売り場。手作り製品から大量生産品まで幅広い商品を揃えていることで有名な店。そのベンチに座って、アリスが着替え終わるのを待ってしばらく。タブレット端末に表示されるクーポンの一覧から、この店で仕えるクーポンがないかを探してみるが、残念なことに無かった。割引はなく、店員の勧める高い商品をそのままの値段で買わないといけないというのが、少々厳しい。余裕はあっても出費は抑えるのが矜持なのに、この前といい今日といい、少し奮発しすぎなような気がする。

「クロード」

画面に表示される預金残高を見つめていると、アリスに肩を叩かれた。顔を上げると、布に包まれた豊満な母性の象徴が目の前に二つぶら下がっていた。水着を鑑賞するには少し近すぎるので、肩を手で押してアリスを少し離す。

「……もう少し慌てろよ、面白くねえ」

不満そうな顔をするアリス。俺がそういうことに耐性があるのは知っているだろうに、どうしてこう露骨なアプローチばかりかけてくるのか。

「つまらない事ばかり仕掛けるくらいなら、恥らいでも覚えろ」

「ハッ、そんなもの六年前に捨てたぜ」

六年前？ ああ、イジメの終着点になった、あの事件のことだろうか。それなら、そうだな。あれだけひどい事があったんだ。まともな精神を保っていられるだけ良しとしよう。

「……すまん」

「なんでお前に謝られないといけないんだよ。お前に責任はないのに」

確かにあの事件に俺は関わっていない。俺がもう少し早く帰省していれば事件は起こらなかったかもしれないが、所詮はもしもの話。俺は事件の起きた理由に一切の関係のない第三者。被害者本人、アリスたつての願いで後始末こそしたが、それに対しては礼を言われこそすれ、謝る必要は微塵もない。ただ、俺が謝っているのは辛い

ことを思い出させたということ。認識の食い違いだろう。

「まあ、それはともかくよく似合ってる。それを買うのか？」

で、肝心の水着だが。これがまた、なんとも言えない。普通といえば普通だし、普通でないといえば普通でない。海でなら「それはおかしい」と突っ込まれるだろうが、今日行く予定の場所はプールだ。それならまあ、普通なのかもしれない。ただ、バストのサイズが合っていないのか、豊満な胸が押しつぶされながらも抵抗し、水着を押し上げているため、横から少し房が見えてしまいそうな気がしてならない。

それにしても、競泳水着なんて普通の水着店で売っているものなのか。少し驚いた。

「買ってくれるのか？」

その大多数の男にとって刺激的な格好で尋ねられれば、同性愛者か重度のペドフィリア、または熟女好きでもなければクビを縦に振るだろう。俺は別に、彼女に頼まれれば大抵のことは聞くが。しかし頼まれることがほとんどないのが、少し悲しいことではある。

「買えと言うなら」

俺はすでに目に入った黒無地の海パンを、サイズを確かめてからカゴに入れてある。あとはアリスが選んだものをレジに持っていくだけ。

「じゃあこれの代金は俺が出す。お前にばかり金を出させるのも悪いしな」

「この程度の出費なら痛くも痒くもないんだが」

「いいんだよ。こういうのは自分で出さないと意味が無い。お前へのプレゼントもまだ買ってないんだし、おごってもらうのは悪い」

そういうことははっきり言うべきではないと思う。もう少し包んだ言い方で、暗に忘れていたということを示すように言ってくればまだ落胆の念も軽くて済んだだろうに。それにしても、自分と同じ誕生日の相手なのだから、買っておいでも罰はあたらないのではないか。

まあ、一緒に何でもない時間を過ごせるというのも一種のプレゼントのようなものだが。

「俺はお前が何を欲しがるかわからなかったから、あえて何も買わなかったんだ。忘れてたわけじゃない」

「そうか。なら元の服に着替えてくれ、バスの時間が近い」

別に一本逃したからといって、一時間も二時間も待つわけではない。精々十分か十五分程度だ。しかし、時は金なりとも言える。楽しい時間はあっという間に過ぎていくのだから、遊ぶ時間は一分一秒でも長いほうがいいに決まっている。誰だってそうだろう。俺だってそうなのだから。

「はいはい。つーか着替えるの面倒だからこの上に服着ていたらダメか？」

「会計のときに困……いや、まあいいか。店員さん、ちょっといいですか」

「はい、お呼びでしょうか」

ちょうど近くにいた店員を呼んで、少し話をする。支払いをしてレジで商品タグについているバーコードを読み取れば、防犯装置であるマイクロチップが動作を停止して、店の外へ商品を持って出て

も警報が鳴らなくなるらしい。つまり、支払いさえすれば中に着て外に出ても問題ないということなので、アリスの言うことは別に問題ないそうだ。なので、店に居る他のカップルを避けながらレジへ歩く。イチャつくのは大いに結構だが、もう少し邪魔にならないところでイチャついて欲しい。店の前のベンチとかなら、邪魔にならないし人通りも多いから他人に見せつけるのにも丁度いいだろう。

会計を済ませて、店の外へ出る。またもカップルが邪魔だったが、多少ぶつかるのは無視して人ごみの外へ出た。小さな声で文句を言われたが、全部無視しておいた。一々ぶつかった程度で謝っていたらキリがない。

「ふふん、プールが楽しみだな。泳ぎで俺に勝てるか？」

店を出て、ショッピングモールの通路に出ると、アリスが急にそんなことを言ってきた。定期的に訓練の一環で泳いでいるが、着衣水泳と普通の水泳では訳がちがうだろう。しかし、訓練では重装備で泳いでいるので、重りがなければ早く泳げるかもしれない。

アリスはアリスで泳ぎが得意な奴だ。それはもう、過去の経歴さえなければ水泳の選手になっていてもおかしくない位に。だから、俺とアリスのどちらが勝つかは予想できない。

「どうだろうな。勝つかもしれんし、負けるかももしれん」

特技が勝るか訓練が勝るか、どっちが優勢かなんて訓練の度合いによって変わる。格闘技が特技の奴がミツチリ訓練した軍人に勝てるかというと、特技のレベルによる。特技を磨いて達人レベルになつていれば専門職にも勝る可能性はあるし、そうでなければ負ける可能性のほうが高い。つまり、互いの訓練のレベルによるということだ。この場合は格闘を泳ぎに置き換えればいい。

「じゃあ着いてからのお楽しみだな」
「そうだな」

モールの出口近くになると段々と人ごみの密度も下がってきて、こちらが避ければぶつかることも無くなってきた。それでもぶつかるとしたら、こちらの不注意か、相手の不注意か。そのどちらでもないとするれば、故意によるもの。最近でもそういう手口で若者が因縁を付けて暴行を加え、金品を奪うという事件が起きることがままある。まったくもって理解に苦しむ社会問題だ。金が欲しいなら働けばいいのに、なぜ捕まるようなリスクを犯してまで金品を強奪するのか。ルールを守るということが愚かしく思える彼らの思考は、集団秩序を順守してきた俺には理解することができない。

少し訂正。身売りの経験がある時点で秩序は守っていない。

「それにしても、楽しみならもう少し楽しそうな顔をしろよ。なに気難しい顔してんだ」

「すまん、少し考え事をしてた」

「まさかとは思うが……他の女の事、じゃないよな」

笑顔で尋ねてはいるが、喜怒哀楽の喜、または楽からくる笑いではなさそうだ。そもそも笑うという行為は相手に「歯を見せる」ということで、動物に当てはめれば「牙を見せる」ということになる。イコール相手を威圧するという意味も含まれているので、これはそのための顔か。

俺がアリス以外の女のことを考えるなんて、結構な頻度であるな。最近じゃアンジェリカさんの事とか。ただし、さっきは微塵も考えていなかった。

「いや、突発的な考えが逸れに逸れて、いつの間にか社会問題のことについて考えてた」

「お前の思考回路ってどうなってるんだよ」

「……」

少し歩きながら考えてみる。

「よくわからん」

優先度なら答えられるが、考え方というのはよくわからない。他人にわかるはずがない。わかる人も居るかもしれないが、それはかなり希少だろう。

「ああ、バスが来たぞ」

のんびり話している内に、プール行きのバスが来た。バスには遠目でもわかるほど結構な数の人が乗っていて、どうも座る席はなさそうに見える。バスの中で立つのは、少し不安定になりそうな気がするが。まあ、贅沢は言わないでおこう。いつも利用する交通機関はタクシーだけだし、たまには庶民的な公共の交通機関を使うのも悪くないだろう。

社畜と恋人の遊び

水に入ると安心するという人は、結構多いのではないかと思う。もしかすると、実際にはどちらかと言えば少数派なのかもしれない。とりあえず自分がそうなので、そういう事において、なぜ水に入ると安心するのかを考えてみる。パツといくつかの考えが浮かんだ。

まず一つ。人間の発生には水が不可欠。試験管の中だろうと機械の中だろうと母の子宮内だろうと、それは変わらない。だから生命の根源である水の中に入ると安心するのではないかという考え。

次。意識のはっきりとしていない、はっきりとした記憶の残っていない胎児の間。その時体は羊水に包まれている。その母の腹の中にいる感覚を想起して安心してしまおうとか。

その次。はるか昔に遡るが、全ての生命がまだ海を漂うバクテリアだったとき。遺伝子の奥底に眠る記憶を掘り出して、本能が母の腕の中に包まれていると誤認して安心する。学者の好きそうな、ロマンチックな考えだ。

最後、水に潜れば弾に当たらない。水面下に少し潜れば、小口径の弾薬は水面で跳弾する。垂直に近い角度で撃っても碎け散る。対物ライフルの弾丸でも、一メートルも潜れば当たらない。弾の届かない安全地帯に居るという認識が、体の緊張を解してくれるのだらう。

さて、考え事をしながら準備運動をして、体もほぐした。何時の

時代でも泳ぐ前には準備運動。準備運動を入った直後に足がつる、なんてことは今の時代でもよく起きる。もちろんそれで溺れる阿呆も。科学は発達しても、人間の体が変わるわけではないのだ。そこらを理解してない阿呆がよく溺れて新聞に出る。

縦五十メートルの長方形のプールの端に、ブイで区切られているところがある。水遊びを楽しむ人と、純粹に泳ぐ人を区切る境界線。その泳ぐ人側のプールサイドに立ち、隣に立つアリスの顔を見る。向こうもこっちを見ていたようで、目が合った。

「子供の頃以来か？　こうやって一緒に競い合うのは」

「小さい頃のこととはあまり憶えてない」

いつか遊んだという記憶は朧気ながらに覚えているが、どの年齢の時に遊んだか、というのは全く覚えていない。ハードな訓練の記憶に押し流されて、実戦の強烈な衝撃に上書きされて。残しておきたい記憶というのは、どうしても忘れてしまいがちだ。

忘れたい記憶は逆に、嫌でも残ってしまうが。

「じゃあ、さっさと泳ぐぞ。百メートル」

体を前屈させ、つま先に指先をつけて飛び込みの姿勢を取る。それに合わせてアリスも同じ姿勢を取る。

後ろから見ている男は、後でバレないように処理しよう。

「三、二、一」

台を蹴って、水面に飛び込む。全身が水の中に沈んで、あまり深くないプールの底を這うように泳ぐ。こうやって泳いでいると、水棲哺乳類にでもなったような気分だ。水中に住み続けて進化した動

物と、陸に住み続けて進化した動物とで、どちらが早いかといえば、当然水棲動物だろう。

水をかいて進みながら隣を目線だけで見る。アリスとは完全に並んでいる。やはり早い。

プールの半分の線が見え、少し息が苦しくなってきたので水面に浮上して息継ぎをする。そのままクロールで進んでいくが、浮上した時点で少しアリスに負けている。

百メートルしか泳がないので体力の分配はあまり考えなくていい。ピッチを上げて、すぐに追いついて、そのまま追い抜く。ちょうど飛び込んだ側の対岸にタッチし、体を曲げて壁を蹴ってターン。また戻りに泳ごうとして、左肩に異常を感じる。ピリピリするというか、変な音がすると言うか。

「……」

故障かそうでないかは知らないが、帰ったらメンテナンスするの
で、無視して泳ぐ。いくら頑丈といっても、義手をつけたまま泳ぐ
なんてことは想定されていないはず。ただ、そうすぐに壊れたりは
しないと思う。

「クロード、俺の勝ちだな」

飛び込んだ側の壁にタッチしようとする、横から声が聞こえた。
どうやら一瞬だけ、アリスが早かったようだ。無視していたと自分
では思っていたが、少し気になっていたようで、それが枷になり少
し遅れたのだろう。

「一瞬の差だったがな」

「そうだな」

義手でなければ勝ってたかもしれない。あくまでかも、だが。ああ、こういうのを負け惜しみと言うのだろうか。別に悔しいわけではないが。

「最後の一瞬で気を抜いたのが敗因だな。勝負でそれは命取りだぞ」
気を抜いたわけではない。一瞬だけ義手に気が逸れた。その一瞬の間に抜かれたのだろう。しかし、勝負で一瞬の油断が命取りというのは全くの正論だ。というより限りなく真理に近い。

「勝ちを譲ったとは考えないのか」

「女に華を持たせる、って考えをするような性格じゃないだろう？
それに、あれはあきらかに何かに気を取られてた感じだ」

一瞬だけだったのに、よく観察している。もしかすると、こちらを観察していられるほど余裕があったと思うと、少し悲しいが。

もしかすると、互角と思っていたのは俺の勝手な思い違いで、本当はアリスの方がよほど泳ぎの実力があるのかもしれない。そう思うと、より悲しくなった。

「手、抜いてたか？」

「そんな余裕があると思うとは、お前も俺のことをわかってないな」

わかっていないが、ソレは仕方ないことだ。人間は誰もが、他人のすべてを理解することはできない。だから相手の理解しきれていない部分は予想で補う。そして予想はあくまでも予想、真実ではない。なので今回のように、予想が外れることは珍しいことではない。

「その程度のこともわからないなんて、伴侶失格だろ」

その考えを見透かされたかのように、俺を咎める発言をする。

「仰る通りでございます」

自分の甘い考えを咎められて、少しだけ反省する。もう少し自分に厳しくしたほうがいいだろう。アリスはそのほうが好ましいと思うだろうし。

「指輪も渡さないほうがいいだろうな……」

聞こえない程度で小さくつぶやく。

「ちょっと待った。今なんて言った」

聞かれたか？ 聞かれてマズイことではないが。

「なんでもない」

「言えよー、いいだろ？ 俺とお前の仲なんだし」

確かに仲はいいが、後のお楽しみというやつを事前に明かしてしまったら、楽しみが半減してしまう。今言って驚かせるのもいいが、最初に決めておいたことを今変更する気はない。

「聞き取れなかったほうが悪い」

「そう言うなって。俺に教えたらマズイことなのか？」

さっきも言った通りマズイことではないが、言ってしまったては面白くない。焦らしに焦らして、事を明かしたときの反応を見るのが

楽しみなのに、わざわざ教えるなんて愚の骨頂。

「さあな」

驚く顔を想像するだけで、顔のニヤケが収まらない。楽しみで楽しみで、それが顔に出るのは仕方がないのだが、顔を手で覆ってどうにかして表情をいつもの不愛想な顔に戻す。

「なんだよ、ニヤニヤして。気持ち悪い」

「不快にさせるつもりはなかった。すまん」

素直に謝っておく。ここで不和を起こしても特になることは何一つ無いし、素直に謝っておいて後で油断したところに一撃。とても楽しみなイベントだ。さて、どんな顔をするのか。

「で、もう一回泳ぐか」

「義手にどうも違和感があってな、水遊びはともかく泳ぐのは遠慮させてくれ」

曲がりなりにも軍用なんだから、泳ぐことを想定して作られていてもいいのではないかと思う。しかしそこまでいくと、ひどい額になるかもしれないと思ったり。今つけている義手でもかなり高価なのに、これ以上高くなるとさすがに財布事情が厳しくなる。

ただでさえ『プレゼント』に大金を費やしたというのに、義手が壊れて修理するとなったら……嫌になる。銀行の口座に入ってる金の桁がいくつか減ることになるだろう。

「一回だけじゃ満足できないぞ。満足するまで付き合ってもらおう」

「ベッドの上ならともかく、プールで言うセリフじゃないな」

「言わせてくれよ頼むから」

これからも、そのセリフをベッドの上で言わせることはないだろう。アリスのトラウマを刺激するようなことは、絶対にしないと決めている。

もしかすると、意に反してそんなことをすることがあるかもしれないが。寝起きをアリスに襲われるとか。

社畜の挨拶

メメント・モリという言葉がある。古代ローマの言葉で、ラテン語というものらしい。意味は「死を記憶せよ」「自分がいつか必ず死ぬことを忘れるな」ということらしい。この言葉は社長から教えられた。「いつ死ぬかわからないのだから、一秒でも長く生きられるように常に注意を払っておけ」とのことだ。しかし調べてみれば、この言葉はイザヤ書の「食べ、飲め、そして陽気になろう。我々は明日死ぬから」というのが起源であるという。起源の方の意味が正しいのか、社長の使い方が正しいのか。どちらが正しいのかはわからない。もしかすると両方正しいのかもしれないので、日々注意を払いつつ楽しくすごすことを心がけている。この前の左腕の件も、一歩間違えば胴体が吹っ飛んで死んでいたかもしれないのだ。こういういつ死んでもおかしくないような仕事をしているのだし、この言葉はどんな言葉よりも頭に残っている。

ちなみに、ヘンリエッタはこれがテストに出て、メメント・モリと書くところをマル・マル・モリ・モリと書いて×をもらったらしい。なんとも愉快的話だ。

「重い話かと思ったら、最後笑いの方向でしめやがった……」

それでも気配りは上手い方だ。恋人との談笑中にそんな重い話で場を盛り下げようなことはしたくない。

「で、こんな話をした理由はなんだ。なんとなくで話す内容じゃないだろ？」

「俺はいつ死んでもおかしくないから、浮気するなら勝手にしろって意味だ」

自分はいきずりでなら結構やってるし、浮気したければすればいい。それでお互い様。まあ、こいつが他の男と付き合うなんて考えられないが。トラウマあるし。

「おいおい、お前一筋の俺にそんな事言うなよ」

俺一筋か。嬉しいことを言ってくれるが、彼女はバイセクシャル。男に対するトラウマはあっても、女に対してはそういうのはあまりない。男勝りな雰囲気の子か、女を口説いて百合の花を咲かせることもままあるらしい。横取りを警戒すべきは、男よりも女かもしれない。

「なんだよその顔は」

「お前の親と会うのは初めてなんだ。察してくれ」

さっきの考え事もあるが。

反対されるかもしれないことを考えて、穏便な方法で説得することを考えると、非常に緊張する。仕事の交渉では武力をチラつかせて脅し、そこから説得に持ち込むことが仕事でのやり方だが、今回ばかりはそれができない。しかしそれでもどうにかして交渉で説得して、どうにか矛盾を納めてもらう。

かなり難しい交渉になるだろう。

「大丈夫だ。うちの親父はゲス野郎だから、名刺と金を渡せば一発で首を縦に振る」

自分の親をゲスと呼ぶか。しかしそのほうが楽に済むかも知れない。そういう人間は大抵は成り上がりたい、金を得たい、権力を得たい。この三つの欲望を持っているから、一言二言の甘言を用いれ

ば簡単に手のひらの上で踊ってくれる。対して良識を持ち、確固とした意志を持つ人間は非常に扱いづらいので、普通の親よりは楽に済むかもしれない。

「母親はどうなんだ？」

「良識のある一般人、と思いたいね。さ、行こうぜ」

手を引かれて門を通っていく。一步入ると、趣味か嫌がらせでやっているのかと言うほど、過剰な数の監視カメラが目にとまった。玄関にあるのはまだわかるが、窓や花壇、植え込みの中、石畳の間、本当にいたるところにある。ざっと数えて二十以上はあるだろう。おそらくセンサーもあちこちにあるに違いない。

ここまで嚴重すぎると言ってもいい警備があるからには、よほどの機密か財があるのだろう。

彼女はゲスと言ったが、もしかするとゲスではなくて頭の回る政治家のような人間なのかもしれない。

考えを顔に出さないよう気をつけながら石畳を歩いて、玄関につく。ノックをしようとドアに手を伸ばそうとすると、アリスがいきなりドアを開いたので慌てて手を引っ込める。

「さ、入れ」

「……」

言われるままに建物の中へ入る。我が家ほどではないが、それなりに広いエントランスホールと、そこそこ豪勢な調度品が多数。これだけ広ければ屋敷の清掃、維持に使用人が何人か居るはず。娘が帰ってきたのに一人として迎えが出て来ないのは、少し不思議だ。うちなら帰ったら確実にホールに何人か出てくるのだが、この家では違うのか。きっと違うのだろう。

いや、それはない。入るまでにあった大量の監視カメラ、あれは警備のためにもあるのだろうが、客人を迎えるときのためにも使う。だのに、迎えがないのは少しおかしいような。

「アリス！」

ホールを中心くらいまで歩くと、上から男性の声がした。声の主の方へ向くと、悪役面でひげを生やし、でっぷりと太ったオッサンが居た。呼び捨てにするからには、アリスの父親だろうか。その隣には若いメイドが一人控えていた。

「うげ……親父かよ」

「よく帰ってきた、アリス。で、そちらの男性はどちら様かな？」

「はじめまして、お宅の娘さんと交際させていただいております、クロード・メイユールと申します。本日は重要なお話があって参りました」

営業スマイルで相手をする。交際という言葉に反応して少し表情を歪めたが、いきなり帰れとは言われないだろう。俺の名前は、少々野心のある人間ならば知っていてもあまりおかしくない名前だ。相手がアリスの言うとおりの人間なら、間違いなく取り付いてくるはず。

「ふむ、どこかで聞いた名だな。まあ、とりあえず上がりたまえ。君は彼を客室に案内してやってくれ。私は妻を呼んでくる」

あれ、なんで知らないんだ。俺って実はあまり名前を知られてなかったりするのか？

「かしこまりました」

そう言うときメイドは、向かって右側の階段を降りてきて、俺たちの前に立った。

「お久しぶりでございます。アリスお嬢様」

「お嬢様ってのはやめてくれ、背筋が寒くなる」

うちのメイドと同じような感じだ。歳はずいぶんと違うが、主人に対する敬意と、仕事に対する誇りをしっかりと持っているように見える。

しかし、アリスはメイドに対して苦手意識を持っているようだ。小さい頃から世話をしてもらっている相手には親愛の情を持つて接するべきだと思うのだが。

「そして、そちらは……お嬢様の旦那様になられるお方でしょうか」

「彼女のご両親との交渉の結果次第です」

「お嬢様の婚約者がポリス社社長補佐、クロード・メイユール様ともなれば、ご主人様も反対なさらないでしょう。異例の若さでその役職にまで上り詰めた異才として有名になお方ですから、もちろん存じ上げております」

褒められて悪い気はしないが、胸中は複雑だ。社長補佐は最低限の能力と、社長に気に入られるという運さえあれば誰にでもなれる。俺なんてほんの中の上程度の実力しかなくて、ある程度の外国語が話せて、あとは運で社長補佐になれた。他の人から見れば、さぞ羨ましいに違いない。

それで、今度はその運で婚前交渉を楽に済ませることができるかもしれない。とことん運に恵まれてるな、俺の人生。いや、昔ついてなかったからこそ今運がいいのかもしれない。

「もちろんそのような肩書きを抜きにしても、私からはお嬢様わたくしにふさわしい方のように見えます」

「ありがとうございます」

人を褒めるのが上手い人だ。この言葉がお世辞だとしても、嫌味を全く感じさせない。

「では、客室まで案内させて頂きます」

メイドが後ろを向き、そのままスタスタと歩き出したので、その後ろをアヒルの子供のように歩いて行く。横を向けば、アリスがエサを頬張ったリスのように可愛らしく頬をふくらませていた。普段の行動とのギャップにうっかり笑ってしまいそうになるが、歯を食いしばって耐える。家の外と中では人が変わるのは当然なので、不機嫌になったときの行動も変わるのだろう。

しかし、なぜ不機嫌になっているのかわからない。

「なんでそんなに不機嫌そうにしてるんだ？」

なので、思い切って聞いてみた。

「あのクソ親父がお前のことを知らなかったからだよ。メイドのこいつだって知ってるのに」

そんなことで不機嫌になるのか。女の怒る基準はよくわからんな。

「なんでお前みたいな大物を知らないんだよ！ 近くにある大企業の官僚とか政治家が開くパーティーには必ず出席するような親父が、世界トップの大企業の社長補佐のことを知らないなんて、ありえないだろ！！」

「うちの会社はタイプが違うからな」

世界で通用する企業というと、大抵車とか家電とか、そういう日常的に使うような物を取り扱っている所が多い。銃器や兵器を作っている会社は少数派。パーティーを開くとしても、武器商人、民間軍事会社、それと軍需企業の人間しか呼ばない。アリスの父親のような資本家の立ち入る隙間はあまりないので、知らないのしかたないのかもしれない。

「お前はそれでいいのかよ」

「別に構わん」

誇るような仕事でもないし、現場での指揮権はともかく、社内の権力は大了たことはない。役職名だけ聞くと偉そうに感じるが、中身は案外そうでもないのだ。危険手当で結構な給料はもらえるが。

「それでは部屋に入ってお待ちください。もしも何かご要望がありましたら、なんなりとお申し付け下さい」

「気持ちだけ頂いておきます」

俺は招かれざる客に値する、かもしれない人間だ。そこまでされるような客じゃない。そもそも客でもない。この家の主人、彼女の親からすれば、娘を奪いに来たどこの馬の骨とも知れぬ男だ。歓迎されるべきじゃない。

コンコンとドアがノックされると、そのまま開いて、妙齡の女性が入ってきた。その後にアリスの父親が入ってきた。女性の方は、アリスの母か。

二人はそのままテーブルを挟んだ向こう側のソファに座る。方や非常に陰しい表情で。方や内心の読めないニコニコ笑顔で。

アリスの評価は少し間違いだ。さっき会ったときは少し離れていたらよくわからなかったが、この人は絶対にゲスなどではない。娘のことを思う親だ。ただのゲスなら自分の子のことなど道具くらいにしか見ない。うちの母親がいい例だ。

「さて、ここに来た理由はわかっている。まずは改めて自己紹介としよう」

ふう、と一度ため息をつき、改めてこちらを睨む。それに対してこちらは営業スマイルを崩さずに、じっと相手の目を見続ける。こんな威圧に怖気付くようなら、こんな仕事はやってられない。

「私はアリスの父親。名前は知っているだろうから、言わないぞ」

想像以上に悪く思われているようだ。まさか名前すらも教えてもらえないとは。

「いけませんよ、あなた。あのクロードさんが来てくれたのですから」

「ふん、こんな小物に、娘をくれてやる気はない」

小物扱いされるのは慣れないな。いつもどこへ行っても担ぎ上げられて、こうして格下として扱われることなんてなかった。

「親父。お前誰に物を言ってるんだ」

「……誰に？ 誰にだ？ そんなの決まってるだろう、娘を奪いに来た愚か者にだ！」

顔をマグマのように真っ赤にしながら、聞くものを竦み上がらせる怒鳴り声を上げる。これは話をまとめるのに難儀しそうだ。

「とりあえず、名刺をどうぞ」

いつも使っている名刺を差し出す。俺の名前はともかく、ポリス社を知らないということはないだろう。このスイス最大の会社。知らなければ野心家でもなく、下衆でもなく、ただの世間知らずだ。

「……」

「クロード・メイユール。ポリス社で社長補佐をやっております」
「ポリス社とは、あのポリス社か」

小物と思ったら想定外の大物、とでも思ったか。まるで鳩が豆鉄砲を撃たれたような顔をしている。愉快といえば愉快だが、少々罪悪感が胸を苛む。

「どのポリス社かは存じませんが、軍需企業のポリス社であるなら間違いありません」

「……若いからといって、見くびるべきではなかったな。すまない」
「謝られることはありません。事実、会社での権力はさほどありませんから」

権力といえは一個中隊の指揮権を持っている程度。それ以外だと社長の命令がない限り平社員一人動かせない。普通は見下されるのが当然で、いつものように持ち上げられるのは普通じゃない。

「謙遜しなくてもいい。君はすごい」

男にほめられてもそれほどうれしくないし、このままだとどんな話が横に逸れていくような気がしてならないので、無理やりに本筋に戻すことにする。

「今日は会社の人間としてきたわけではありません。娘さんの婚約者として来たので、そういった話はまた別の機会にお願いします。あと、賛成か、反対かの結論を先に教えていたきたい」

「……そうだな。親心から言わせてもらえば反対だ。手塩にかけて育てた娘が自分の下から離れるのは辛い」

「ケツ、何が親心だ。娘がランチされてレイプされても怒りもしなかった癖によく言うぜ」

ああ、頼むからこういうところで喧嘩しないでくれ。交渉するのに相手の弱みを突いて精神状態を乱すのは有効な手だが、俺はできれば平静な状態で対話を行なって説得したいんだ。浅くない付き合いなんだから、そのくらいわかってくれ。

「その話はまた後でしょう。して、クロード君。アリスは君との結婚に賛成しているのか？」

「それは私よりも本人の口から聞くほうがいいでしょう」

隣でふんぞり返っているアリスに視線を向ける。

「馬鹿か。賛成に決まってんだろ」

期待していた通りの答えだ。それを聞いた彼は、大きくため息をついた。

「……そうか。ならばあと一つだけ聞かせてくれ。君は娘を幸せにできるか？」

「わかりません。仕事柄、いつ死んでもおかしくないのです。しかし最大限の努力は行います」

「ここは嘘でも『絶対幸せにします』と言うのがテンプレートな返答なのだが、こういった相手に下手な嘘は通じない。こういう人種は嘘をつくのが上手いから、下手な嘘はすぐに見抜かれる。そんなのよりは誠意ある真の方が、いくらか印象がいいだろう。」

真実の内容はともかく。

「もしも娘を不幸にしてみろ。貴様の墓を重機で叩き壊してやる。私からは以上だ。フィオナ、お前からは何かあるか」

「えーと、私かしら？ そうね。私からは特に何もないわ。社長補佐さんともなれば、収入もかなり安定しているでしょうし、結婚生活を送るにしてもお金が不足することはないでしょう。さらにお互いに結婚したいと思ってるなら口を出すのは野暮ね。まあ、頑張りなさい」

……なにはともあれ、意外とアッサリご両親の承諾はもらえたようなので、目的は達せた。肩に載っていた九十キロほどの荷が降りた気分だ。これで、今日やることの八割は終わった。あとは家に帰って、エッタの手料理を食べて、食後にアリスに指輪を渡せば全部終わる。

「今日はお時間を割いていただき、ありがとうございました。では、失礼します」

席を立ち、敬礼してから部屋を出る。アリスも後ろについて出てくる。さらにメイドが見送ろうと出てきたが、見送りは遠慮させてもらった。何度も言うように、俺は客ではないのだから見送ってもらうような立場じゃあない。

社畜とプレゼント（前書き）

実に24日ぶりの更新となります。遅くなっ
てごめんなさい。

社畜とプレゼント

自分が優先するようなものは、時間の流れにより変化するものだ。十何年か前には配属された部隊への忠誠。一部隊の構成員から社長補佐になったときには、社長の安全を最優先に。

そして、今は『家族の安全』アリスを含む家族だ。母さん、ヘンリエッタ、アリスの三名。

一番に優先すべきは家族の安全。もしこの先何か特殊な事情により命を落すことがあれば、その時は家族のためだろう。

「兄さん、そんなにボーっとしてどうしたんですか？」
「なんでもない」

目の前にある真っ黒な「シチュー」を口に運ぶべきか。ヘンリエッタが折角作ってくれたこの料理らしい物体を食べたとして、生きて明日を迎えることができるだろうか。

……まあ、さっきのは少し誇張しすぎな表現だが。少し炭を食べただけで死ぬなんてことはまずないだろう。

「ああ……ごめんなさい。火を弱くしないままキッチンから離れてしまっ」

ここは、どうするべきだろうか。折角作ってくれた料理なんだし、責めてやるのもかわいそうだ。部下に対してなら二度と失敗する気にならないよう徹底的に叩き潰すが……相手は妹だ。

「気にするな。日本じゃ焦げた部分も食べるらしいから」

ここは責めたい気分になるのを耐えておく。誰でも失敗はするも

のだ。それが初めてなら尚更。だから、焦げに焦げたシチューをスプーンですくって食べる。味は言うまでもなく、苦い。さらに焦げた匂いも相まって、とても食べれたものじゃない。

だが……

「……どう、ですか？」

俺は上目遣いでさらに期待に目を輝かせている妹のレアな姿を見て「どうですか？」なんて聞かれて、「マズイ」なんて批難ができるような冷血漢じゃない。そんな事を言って泣かれたら、多分泣かないだろうが……心が折れる。

「少し焦げた匂いが気になるな」

「……」

そう言う途端に肩を落とし、何も言わず、まるで死体のような目でジッと見つめられる。なんて目だ、死にたての魚のほうがまだ生氣を感じられる。これはさすがに、フォローしないとマズイ。

「まあ、不味いわけじゃない。次は焦がさないように気をつけろ」

本当のことを言えば、恐ろしく不味い。しかし一生懸命作ってくれた妹に対してそんな事を言うのは非常に悪い気がしてならない。

おそらく焦げさえしなければ美味しかったのだろう。辛うじて形を保っている食材も、大きさを揃えて切られていることはわかるし、シチューというものは市販のルーの箱に書いてある通りに調理すれば不味くなるようなことはまずないのだから。

「……はい、ありがとうございます」

多少ひねくれていると言っても、褒められれば嬉しいか。いつも大人ぶっている割に、子供のようなところもあるんだな。素直なんだか素直じゃないのか。

話をしながらも、ずっとシチューを口に運び続ける。味覚も嗅覚もすでに死んでるから、もう苦じゃない。

「何を笑ってるんですか！」

顔に出ていたようで、少し顔を赤らめながら怒鳴られる。

「うれしいからに決まってるだろ。少々失敗しても、ちゃんと誕生日を祝ってもらえてるんだ。ごちそうさま」

ようやくシチューがなくなったので席を立つ。今日は悪意のない攻撃の恐ろしさを存分に思い知った。できればもう二度と経験したくない。

「いいプレゼントだった。ありがとう」

一応、自分にできる精一杯の笑顔を作り、仕事のように本音を包み隠して、微塵も感謝の念など感じていないが礼を言っておく。年下の機嫌を取るのが年長者の務めだ。

席を立って自分の部屋に戻ろうとする。

「え、あの、プレゼントはまだあるんですが」

「そうだったのか。てっきりさっきのシチューゲテモノがプレゼントかと思っただが」

少し気が早かったようだ。俺としては早く飴でも舐めて口の中の苦味を消し去りたいんだが。

「いいえ、まだあります。これが、私からのプレゼントです」

エツタがゴトリと机の上に置いたのはスーツケース。にしてはやけにゴツイ箱。というか、スーツケースならいくらひ弱な婦女子でも両手で持ち上げるほどの重量はないだろう。

中身はなんだ？ 金塊か？

「ダイアルロック解除のナンバーは4771です。日本語の『死なない』にかけてみました。開けてみてください」

ダイアルをカチカチと回して、ナンバーを4771に合わせる。ガチリ、と音がしてロックが外れてケースが開く。

中に入っていたのは、今ではすっかり廃れたはずの大口径リボルバー。専用のスピードローダー、弾丸60発、レーザーサイト、整備用具一式、取扱説明書。

とりあえず銃についての詳細が書いてあるであろう説明書を読んでみる。

「ふんふん……トーラス・レイジングブル？ 聞いたことがない。製造年は2013年。弾薬の規格は500マグナム。こんな骨董品がよく残ってたものだな」

こんな化物銃、対人用にしては過剰威力だし、片手じゃどうやっても操作できん。対人なら同じ骨董品でも9ミリ。威力が高くて45マグナムでも十分だと思っただが。

「し、調べたら拳銃はこれが威力が高くて、誤作動も少ないってあったから倉庫から探したんです！」

「威力が高ければいいってものじゃないんだが……まあ貰っておく」

同じ骨董品でも9ミリの方が使い勝手いいし、今では最新型のもっと扱い易い銃を持ってる。これを使うことはないだろう。誕生日プレゼントとしてとりあえず何日か提げておいて、あとは観賞用として部屋に飾っておこう。

「ありがとう」

「喜んでもらえて幸いです」

ひとまず礼を言って、ヘンリエッタの笑顔を見て食堂から出る。食事にも、プレゼントにも、あまり満足したとは言えないが。この笑顔で全部許せるような気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8225t/>

社長補佐物語（仮）

2011年12月26日21時04分発行